

風俗で働く彼女と
付き合う男の話



liverstone

はじめり

最初は、そんなところに働いているのなんて知らなかったし、思いもしなかった。たまたま友人のコウタが主催した合コンで出会った女で、ただただすぐにやらせてくれそうだな、なんてとても彼女の前では言う事のできない理由で、俺は彼女に好意を持ち、その日のうちに彼女を抱き、気付いたら付き合っていたという構図だ。まあ別に俺も軽い方だと認めるし、なので別に彼女が風俗で働いているという事なんて別の彼女の勝手だし、俺はいつでもやりたい時にできればそれで満足、という風に考えていた。

そんな彼女が、今、寝そべっている俺の上に覆いかぶさっている。服は着ている。つまり、やっている最中ではないという事は、わざわざ書く事ではないだろう。では何をしているのかというと、彼女が俺の首を絞めているのだった。こんなことを客観的に見ていられるのはなぜかと言うと、彼女はとても小柄で力が弱いせい、俺の首に付いている筋肉が彼女の握力をいとも簡単に跳ね除け、彼女の俺を殺そうとする意志をまんまとねじ伏せているのだった。

クソッ、死ね、おまえなんか死ね、と彼女は呟きながら俺の首を締めるが、それは俺の体調に何の変化ももたらさなかった。すでに他界した父親が俺をレーサーにさせたかった夢が、こんなところで役に立つとは思わなかった。レーサーは首の筋肉を鍛えなければダメだ、と言うのが父親の口癖で、その恩恵をこんな場面で受けるとは思ってもみなかった。ありがとう、親父と俺は呟き、彼女の腕をつかんで一気に離し、俺は逆に彼女の上に乗った。俺は彼女の上に馬乗りになると彼女が着ているユニクロのキャミソールを引き脱がし、そのまま彼女が着ている衣類全てを半ば引きちぎるようにして脱がせた後自分を無理矢理挿れた。何度か腰を振りあつという間に果てた後、静かに彼女の首に両手を添えた。彼女の息の根を止めるために。彼女は苦しくなると暴れ出したが、体重が倍ほどもある俺が上に乗っているせい、あまり大きなアクションを起こす事はなかった。そもそも彼女にそんな力は残っていないのだった。ギリギリのところ、俺は首に回していた手の力を緩め、その後に涙を流しながら彼女を抱き締めた。いつものことだ。

その日の夜1

圭太はさ、外見は期待できないんだから中身で勝負するしかないんじゃないの？

コウタはそう言うと、目の前にあった枝豆を勢いよく口に放り込んだ。生ビール一杯が150円という破格な値段が目玉になっているこの店は、肴になるものはほとんど全てが「冷凍食品です！」と皿にでも書いてあるのではないかという出で立ちで提供される。それならば油を使っていない枝豆をつまみに飲もうと言うのが俺たちの定説で、それ以外のものはほとんど食べなかった。このつまみをたくさん食べた翌日は二日酔いがひどく、それは酒を飲みすぎたからという理由だけではないだろうという仮説を俺とコウタは立てており、原因は分からないがほぼその仮説は確実だと言う事が俺たちの身体をもって立証されている。

アメリカの男性はビールとセックスの事ばかりを考えて生きてるとこの間会社の同僚が言っていて、それは果たして本当かという話をしながら俺たちは正体不明な生ビールを飲んでいたのである。俺たちの周りにアメリカ人はいないし、本当にどうでもいい話だった。場所が学生街だけに、周りは大学生ばかりだ。ただ先述のとおりつまみはひどいものばかりなので女の子は少なく、大学と麻雀荘を往復しているような小汚い学生ばかりだった。しかも生ビールが150円と言うのは夜7時30分までなのでその時間を過ぎると混雑ぶりはあつという間に解消されてしまう。

そう言えば今度さ、合コンやるんだよね。経理の東さんがさ、ほら、あの同期の、彼女が友達と飲む話をしてて、それなら俺たちも一緒に、て訳で、

東さんは俺たちの同期だった。俺とコウタは大学卒で、東さんは3年間通う事になっている専門学校卒なので俺たちとは同期だが年齢は一つ下のはずだった。その彼女が学生時代の友人と女子会と称した飲み会をするそうで、その話にケイタは乗ったようだ。お前も来るだろ？コウタは相変わらず強引だ。だがその強引さが優柔不断な俺には心地良かった。これから出勤なの、と顔に書いてあるキャバ嬢が外を歩いていて、それに見とれていたら枝豆が俺の顔に当たった。心配すんな、いくらおまえでもそういう店に行くと金を払えばあの娘はおまえに興味をもってくれるって。とコウタは言う。

合コンかー。合コンねー。

その日、東さんは髪を頭の真ん中で分け、そのまま両脇に下ろしていた。いつもは後ろでひとつにまとめていて、しかも難解なまとめ方をしているのでこんなに長い髪を持っているとは思わなかった。会社帰り、平日の合コンなのに会社にいる時とはぜんぜん違う印象になったのが驚いた。普段はあまり詳しく見ていなかったのだが、メイクも普段の時とは違う印象だった。こんなに美人だったっけ。普段はもっと男の子っぽい印象なのに。女ってすげえな、と俺たちは思わず目配せをした。こっちは俺とコウタ、それと同じIT部署にいるエイチの3人だった。俺たちの部署はもともとビジネスカジュアルだったため昼間と変わらず、メイクを変えてきた東さんに対して少し引け目を感じていた。東さんが連れてきた彼女たちは専門学校に通っていた頃の友人たちだそうだが、皆それぞれに可愛げのある彼女たちで、表現力の乏しい俺にはなんとも言えないところだが、皆一様に俺たちの外見を確認した後で、これならOKという顔をしていたので少し安心した。

コウタが予約した店は最近ではすでに定番になっている、少しだけ暗めでジャズが流れるようなへぎ蕎麦の店だった。新宿という街柄、周りもざわついているだろうし嫌だなあと思っていたが、大通りから一本外れただけなのに道は驚くほど静かで、歩いている人も少なかった。この道をまっすぐ進めば異性ではない人を好きになった人が集う街が広がっていることもあり、ここまで足を運ぶ人は非常に限られているのだろう。俺は賑やかな居酒屋が嫌いだったので、少し安心した。ホントは俺こういう雰囲気のところ苦手なんだ、と150円のビールを出す店でもコウタに散々言っていたおかげかと思っただけだが、この店にした最大の理由は、東さんと飲むためだろう。今日はお願ひしまーす、と初対面の彼女たちは言った。女性(しかも同世代の)と飲むのはとても久しぶりだったが、その声を聞いた途端にテンションのレベルが3つくらい上がった。楽しみだ。コウタ、誘ってくれてありがとう。お前と友達で良かったよ、俺。お前、東さんを狙ってるんだろ？アシストするからな。

コウタは東さんを狙っていた。そのことはずいぶん前から知っていたが、傍から見ても肉食系のコウタが東さんに対して攻めきれないでいるのは、東さんの左手に原因があった。薬指に指輪がつけられていたのだった。経理部にいるほかの連中に話を聞いたら東さんは専門学校に通っていた頃にいた恋人と卒業後、すぐに結婚してしまったそうだ。いくら肉食のコウタでも、既婚女性に対してまで踏み込むような野蛮さは無く、東さんが離婚するまで(これは東さん本人から聞いた)はコウタの頭の中には東さんという文字は無かった。

この合コンは東さんを元気付けるためでもあった。東さんは先月、その夫と離婚をした。原因はあまり分からなかったが、子どもが欲しいだの欲しくないだのと云々というところが原因のひとつという事は経理部の誰かから入った情報だった。

実は俺とエイチは、新宿で東さんが夫と歩いているのを目撃したことがある。二人はある小さな病院から出てくる場所だった。そこは産婦人科と不妊治療をやっているところで(その二つにどのような違いがあるのかは未だに俺も良く分かっていない)、遠目

にしか見ることができなかったが、東さんはひどく疲れているようで、当時の夫と思われる男に支えられながら、病院の階段を降りてくる場所だった。俺とエイチは、なんとなく悪いものを見てしまったという素振り、そのままディスクユニオンへ向かった。この夏来日するインディーズバンドが出しているCDの初版を探しに来たのだが、東さんの夫を見てしまったためか、

俺たちはお目当てのCDを探している間もなんだか上の空で、交わす会話にもあまり真剣になれなかった。それほど、東さんの元夫の印象が強烈だった。元夫は、絵に描いたようなダメ男っぷりを外見から匂わせていて、周りには近づけないオーラを十分に発揮していた。髪は金髪、細身で長身、病弱な人のように色白で、ホストが着るように大きく胸元を開け真っ黒なスーツを着ていた。東さんはもっとまともな男性と普通の結婚生活を送っているのだろうと俺たちは考えていたので、そのギャップに戸惑い、俺たちの心に大きな穴が開いてしまった。

CDショップで適当なCDを何枚か衝動買いし、いつもの通りそのまま近くにあるファーストフードでアイスコーヒーを頼み席についた後、エイチは言った。なあ圭太、東さんのダンナさ、なんかイメージと違くなかった？なんていうかもっと、普通人と普通に幸せな結婚をしていると思ったわ俺。エイチは俺とまったく同じ印象だったようだ。ここまで感想が一緒だと、きっと何世代か前の先祖が親戚だったんじゃないかと思ってしまう。それくらい俺とエイチは気が合うようだった。俺も同じ印象だったなー、と言うとエイチは、やっぱそうか、と何か思いつめたような目をしながら、衝動買いしたCDが入っている袋に手を入れた。

今年の初め頃、今年は原点回帰の年にする、とエイチは言った。な、なんだよ急に、いったい何の話？と俺が聞くとエイチが音楽を知った時代に発売されたCDをたくさん買うのだと言う。中学や高校に通っていた頃は欲しいCDはたくさんあったけどバイト代をそればかりに使うわけもいかず、当時は欲しいCDを厳選して買っていた。それが今では毎月定額の給料が入り、自由に使える金額も当時に比べると増えたため、当時欲しかったけど買えなかったCDを発掘して買う年にするというのだ。いまさら、古い曲を聴く気になれるのかと俺は思ったが、5月に入った今でも定期的にエイチはCDを発掘し続け、時々俺に貸してくれている。ブルーの2枚目は2曲目が特に良かった。スーパーグラスは1枚目よりも2枚目のほうが俺には合っていた。ヴァーヴの神々しいストリングスには度肝を抜かれた。エイチが買うのは主に90年代のブリティッシュロックで、ブルーとオアシスが対立していた頃のように思う。エイチは断然オアシス派で、女受けの良かったブルーは邪道だと感じていたそうなのだが、今聞いてみるとテレキャスターがなびく軽めのロックも悪くないな、と思う。俺はブルー派だったかな、と勝手に想像もした。エイチも俺も当時高校生で、俺はずっと日本のバンドばかり聴いていたし、なによりエイチとはまだ出会っていなかった。俺もエイチも、コウタも、その当時は違う風景を見ていたのだ。そして東さんも。

東さんは俺たちの中でマドンナと呼ばれており、ファッションという世界に対してはほとんど疎い俺たちですら、「東さんはオシャレだ」というのが定説になっており、また着ている服に飾られてとても輝いているのだ、常に。エイチはそうでもなかったようだが、コウタと俺の中では社内一の美人だということで決定していた。大学でもミスコンで候補に選ばれるほどの美しさを持っているが、性格が少々男っぽいで男性からは異性というよりも同性に近い存在として見られていた。そんな性格を持つ人間の特徴として、友人や同僚から信頼されるということが挙げられる。東さんは社内では中堅に位置するが、経理部の中ではエースと呼ばれてもおかしくない存在で、ほかの人と比べると輝きが違うように思える。

その東さんが目の前にいて、同じテーブルで酒を飲んでいるという事実がなかなか受け入れられず、俺は戸惑った。

東さんはビールを好んで飲んでいて、つれてきた彼女たちはあまり酒に強いほうではないようで、2杯くらい軽めのカシスウーロンやレモンハイを飲んだ後は、ウーロン茶を飲んでいて。後は目の前にあるシェフの気まぐれシーザーサラダをつまんだり、ついさっきまでどこかの地鶏が携えていた部位が差されていた焼き鳥の串を綺麗に並べたり、会話は弾んでいるが手持ち無沙汰なのが目に付いてきた。その彼女たちのことを書くと、一人は優等生タイプ、顎が大きく、太く長いストレートの黒髪はツヤがあり友人たちからも信頼されることが多いのだろう、自信に満ち溢れた表情には挫折という言葉は私の辞書にはありません、と書いてあるようだった。もう一人はとても華奢で、それを強調するかのように薄い胸、細い肩をしていた。東さんを含め3人はよく喋り、合コンというよりは東さんが主催した専門学校時代の同窓会に俺たちが同席しているような雰囲気だった。彼女たち自身、会うのは久しぶりだそうで、飲み始めてからしばらくは彼女たちだけ、俺たちだけで会話が續いていたので2杯目くらいまでは合コンが成り立つのか心配だった。エイチは我関せずという素振りで、本当は優等生の子を一目で気に入ったのを俺はエイチの素振りから察したが、エイチは自ら動こうとせず、もくもくと出された料理を食べていた。私は(エイチは自分のことを「私」と言う)別にいいです、女の子と会話ができればそれでいいんですよ、いうエイチだが、実は彼女を欲しがっていることは目に見えていた。一緒にライブに行く女性は何人かいるようだが、恋人と呼べるようなステディな関係になっている女性はまだいないようだった。そんな中で優等生は果たしてエイチが持つ音楽の趣味にマッチするかどうか、どちらかというとなかなか難しいだろうなという心境で俺は見ていた。優等生もエイチのことを別に悪くは思っていないようで、エイチの皿に料理を取り分けたりし、とても友好的に見えた。一

方俺は、これはたまたまだったが、華奢な子が気に入った。よく喋る子で、小さい啊が好みだったので、俺はその子ともっと話したいなと思っていた。その子の名前はキョウコと言った。彼女たちからはキョンちゃんと呼ばれていた。キョンちゃんは東さん、優等生さん(マコトさんと言うらしい。彼女たちからはマコちゃんと呼ばれていた)から可愛がられていて、どうやらそういうキャラのようだった。童顔でグラマーの対極とも言える体型の持ち主なことも、それを助長していた。

私、赤羽なんですよー、家。北区のとキョンちゃんは言った。俺は王子に住んでいるので、近いと言えば近かった。良く行きますよー、談、と言うとキョンちゃんは喜んだ。

コウタは明らかに東さんを狙っていた。始まる前からそれを宣言していたので、俺はなんとも思わなかったが、コウタの知らない東さんの元夫との関係が今はどうなっているか、俺とエイチは気になっていた。完全にヒモだ、あの元夫は。それが俺とエイチの共通見解だった。東さんは左手の薬指につけていた指輪をはずしている。いつからはずしていたのかは知らないが、同じオフィスにいて東さんを見てきた中で、髪を切ったとか、メイクが変わったとかという、心境の変化によるスタイルの変更も全く感じられず、なので東さんがいつ離婚したのかということすらはっきり分らないままだった。

キョンちゃんは赤羽にあるとても大きな100円ショップが好きだと言う。誰も見ていないところで一緒にいる人とキスをするのがたまたま興奮するからだそうで、別に品揃えが良いからとか、店員のレジ捌きが見事だからだとか、そういう、ごくあり触れた理由ではないことに俺は驚き、後になって、そんなキョンちゃんの変態趣味に付き合うことになるとは、思いもよらなかった。誰かに見られているかもしれないというドキドキ感、初めは心臓の鼓動がキスをしているキョンちゃんにも伝わってしまうのではないかと心配になり、キスに神経がいかないため、俺はいつまで経っても慣れることはなかった(この話を書くだけでも心臓がバクバクいってしまう)。

いよいよ合コンもお開きになり、それぞれがそれぞれと何となく仲良しになってきているのがよくわかった。俺も、キョンちゃんはやらせてくれるかなあと、途中からそればかり考えるようになってしまっていた。酒が入るとそのことが頭の中の40%くらいを占めるようになる。もうちょっと我慢しろ、俺。攻めるタイミングを見失わないように、虎視眈々と狙っていくのだ。頑張れ、俺。1次会の終わり頃にはだんだん、キョンちゃんの視線が俺を捉える回数が増えてきたように感じていたのだが、後で聞いてみるとそれは俺の思い過ごしだったようだ。

2次会は盛り上がりなかった。エイチとマコちゃんが帰ってしまい、残された4人は変えるタイミングを逸してしまったような雰囲気だった。2次会は砕けた居酒屋だった。大将(と常連から言われていた)は昔ボクシングをやっていたそうで、店の隅このほうに当時使っていたボクシンググローブが佇んでいた。大きなしゃもじを使って料理を出すのが特徴で、その雰囲気はずいぶんと古い居酒屋のような佇まいだが、近くに大学があるせいか若者も多く、安い割りにおいしくてボリュームのあるおつまみが何種類もあるので、若者たちには特に人気があるような店だった。1次会の店からだらだらと駅に向かう途中で見つけた店で、誰も入ったことはなかった。俺たちは適当に酒を頼み(1次会の途中から酒を控えていたキョンちゃんも再びウーロンハイを飲んで)、軽めのさっぱりしたつまみを頼み、そこでまたダラダラと飲んだ。休日前ということもあり、店は遅くまで客でいっぱいだった。東さんは相変わらずビールを飲んでいて、何杯目になるのだろう、東さんの飲みっぷりは見ていてとても気持ちが良い。この間、アメリカ人はビールとセックスのことばかりを考えているって話をし、とコウタが言うと、東さんは、それだけじゃなくてピザのことも考えているよずっと、と言い、キョンちゃんはさらに、ハリウッドスターたちの私生活のことだって忘れてたりしないでしょ、トムクルーズの子どもはすごく可愛いけど、別にそれを知りたいなんて思わないよね。べーつーに一さー、と、キョンちゃんはわざと言葉の節を伸ばして言った。海外セレブのゴシップ雑誌はアメリカでは結構な売れ行きだと聞くが、それはアメリカに限ったことではなく、日本でもおっさんやおばさんが読むような週刊誌だって売れているだろう。

いよいよ2次会も終盤に差し掛かった頃、東さんはぼろぼろと過去の話をした。過去の話というのは、つまり、元夫のことを含めた自分の話だった。コウタは半分眠りかけていたが、東さんが話をしているうちに目を覚まし、まるで枯れかけた花が水を与えられてシャキッとしたようだった。その態度がとても分かりやすく、お前、ちゃんと座ってられるんじゃないか、と思わずツッコんでしまった。

東さんの話を要約するとこんな感じだ。

専門学校時代に出会い、そのまま付き合った彼とは卒業後すぐに結婚した。東さんの出身は静岡で、医療事務の専門学校を卒業したら地元に戻る約束を家族としていたのを振り切って彼と結婚した。というわけで半ば駆け落ちのような結婚で、今でも父親とはほとんど口を聞いていないと言う。母親は気にかけてくれるようで、時々連絡をしたりするが、地元にはほとんど戻っていないそうだ。一回くらいかなあ、帰ったの。お兄ちゃんが倒れてさ。結局すぐ元気になったので、私は実家には戻らず、そのままこっちに帰ってきちゃったんだけど。と東さんは言っていた。

そんな中で結婚した彼だが、病院で働くつもりで入った専門学校には来ることがほとんどなく、いつもフラフラとパチンコに行っ

たり、自宅でずっとパソコンをやっていたり、一見フリーターと言ってもおかしくないような生活をしていた。在学中から別れよう、別れようと思っていたのだが、そのような話になると彼が泣いてすぎるので、そのまま情に負けて付き合い続け、そして結婚してしまったそうだ。何度もキョンちゃんやマコっちゃんに相談をし、涙をたくさん流し、夜中にお腹が空いて牛丼を食べに行ったりしたけど、結局うまくいかなくて別れてしまったんだよね、去年、10月に。なんてお人好しなんですか東さん、とコウタは言うが全くその通りだ。本当に東さんはお人好しだ。けど卒業してからはね、彼も全然仕事をしなくなっちゃってさ、私ってダメ男が好きなのかって初めてそこで気づいたんだよね。マコっちゃんからは早く別れろって言われ続けてたし、けど親からも反付けられた結婚だったから、私の選択は間違いだったっていうことを認めたくなくて。

東さん、意外にダメ男が好きだったのか。それは驚きだった。確かにディスクユニオンの前で見つめた時も、ダメ男ぶりを周りにまき散らしていたが、なんというか、東さんってそういう、脱線しないと思ってたよ。俺は言った。東さんはふふふ、と笑った。しかしもっと驚いたことが起きた。その話を聞いたキョンちゃんが、号泣していたのだ。つらかったよねえ、一緒に泣いたもんねえ、と号泣しながら声にならない声で話すキョンちゃんの涙がいかにも純真か。俺はキョンちゃんを守りたいという感情が生まれてしまった。

だが実はキョンちゃんもなかなかのダメ男好きで、今まで何度もダメな男と出会い、付き合ったことを二人は笑ながら話した。いわば元彼ということになるのだろうが、キョンちゃんが過ごした過去の話を知ると、少し胸が痛くなった。

その日の夜2

あー、なんだか帰りたくないなあ。みんな、帰っちゃうの？寂しいなあー。もっといたいなあー。もうちょっと飲もうよー。新宿駅までの帰り道、キョンちゃんは言った。小さな肩は、もっとみんなと一緒にいたいと言っていた。残りの3人は酔っているのかそうじゃないのか分からず、きっと酔いは覚めているのだろうけど、それぞれに話し疲れ、そして聞き疲れ、結局俺の記憶に残ったのはキョンちゃんの涙だけだった。東さんはタクシーで帰ると言った。今日はありがとね。一緒に飲んで楽しかった。また同じメンバーで集まろうね。来週も会社でよろしく！と、とても晴れやかな顔でタクシー乗り場まで向かっていった。一人で。一人で。コウタは東さ、と言いかけたが東さんは聞こえないふりだろうか、バッグに入っているケータイを探しながらざわついてるタクシー乗り場の方へ消えてしまった。2時を回ったのに東口駅前には相変わらず人が多い。電車が走っていないので、駅は駅としての価値をなくし、ただの建物でしかなくなってしまったが、それでも人は駅を目指して歩いていった。

キョンちゃんと俺は二人になった。キョンちゃんは、まだ物足りなさそうにしている。何を考えているかよく分からないが、デレデレとした笑顔を俺に見せた。真っ白な歯がとてもキレイで、東さんと同じ年ってことは、俺のひとつ下か、そう思うと急に、キョンちゃんをもっと知りたいと思った。

なんだっけこの胸のドキドキって。俺は酔いも覚め、ここからどうすればいいか考えた。落ち着け俺。そして俺のアレも、落ち着け。

もうちょっと飲む？と俺は聞くと、そうだね、静かなところがいいなあ、とキョンちゃんは言った。

俺とキョンちゃんは適当にアルタの裏をぶらつき、まだまだ人がいなくなる道を外れ、細い路地に入った。路地とは言えアルタの裏でも多少の人通りはあるが、たまたま入った細い路地は完全に店と店の背中を通っていて、ホコリや泥で真っ黒になっているガス管のすぐ横で、俺とキョンちゃんは初めてのキスをした。キョンちゃんが俺の背中に手を回し、俺はキョンちゃんに優しく包まれていた。

そこから朝まではあっという間だった。本当に、あっという間。俺たちはほとんど無言で歌舞伎町の方へ歩いていき、隣の国みたいな雰囲気のある街にあるホテルに泊まり、何度かイチャイチャしていたら朝を迎えてしまった。シャワーを浴びながらとか、ソファでとか、ベッドでとか、なんだかよく覚えていないけど、楽しかった記憶ってあまり覚えていないもんだよなあ、と今では思う。少しだけ落ち着いてからマクドナルドへ行き、俺はフィレオフィッシュ、キョンちゃんは何かのマフィンを食べた。店の中にはくたびれた若者たちがいっぱい、まだ夜が続いているような雰囲気ですらあったが、外はすでに明るく、気づいたら人の流れもずいぶん弱く、ダラダラと続いているようだった。朝早く起きた外国人の観光客が興味深そうに街の風景を観察し、写真を撮っていた。毎夜のお祭りを乗り越えた街は今朝もゴミが散乱し、カラスが舞い、外国人が写真を撮る。こんな風景を撮るんだねえ、ガイジンって。キョンちゃんはきょろきょろしながら外を見ていた。二人はあっという間にそれぞれの朝ごはんを食べ終わり、そして二人で埼京線で赤羽まで行き、赤羽で降り、またホテルに行き、6時からやっているフリータイムに感動し二人でまたシャワーを浴び、何度かイチャイチャして昼まで寝て、時間になっても起きなかったので追い出され、そのまま店を出て談に行った。誰かに起こされるとたいがいの場合イラッとするが、二人は慌てて服を着るとダッシュで外に出た。時計を見たら13時だった。こういうの久しぶりだなあ、と思っていたら隣のキョンちゃんも同じようなことを考えていたようで、二人はすでに高い位置にいる太陽を見るとなんだか10歳くらい若返ったような気がした。キョンちゃんにそう言うと、まだ初対面なのにもう古い友達みたいだね私たち、とキョンちゃんは言った。

談は本屋だ。1階は雑誌などがあり土曜日なので賑わっていたが、2階の専門書エリアは空いていた。俺は2階に行くわ、というキョンちゃんは芸能人の雑誌があるほうへ向かっていった。少しだけ観察していると、どうやらジャニーズ系の雑誌に興味があるようで、いくつかの雑誌をバラバラと見ていた。周りは中学生や高校生(といってもまだ垢抜けていないタイプの)の子たちばかりなので、キョンちゃんは最上目に見てもだいぶ年上だった。

日曜日

日曜日はほとんど寝て過ごした。金曜の夜から夜通して起きていたし、ウィークデーのことを考えると体内の時計を正常に戻すことが先決だろうと考えた結果、時差を戻すには寝続けるしかないと思った。キョンちゃんとのことを考え一回だけ自慰にふけたが、身体が疲れているせいか、ことが済んでから残ったものは虚無感だけだった。

午後を迎え、テレビではお決まりのゴルフや競馬などが始まり退屈を極めた時、こんなじゃダメだ、起きようと思ったのは夕方になりかけた4時頃だった。外はこれから迎えようとする夏を前にした気温を保ち、ひょっとして耳をすませば飛鳥山公園で夏を待っている何匹かのセミが勸違いをして鳴き出すんじゃないか、と思える陽気だった。そろでは子どもたちが自転車に乗って公園のほうに向かっていった。

俺は適当なポロシャツとチノパンに着替え、家を出た。キョンちゃんに会えるかなと思い、行き先を赤羽にした。赤羽までは電車で2駅だ。普段は歩いたり自転車で رفتたりするのだが今日は時間も遅めだったし、電車に乗った。電車にはくたびれた顔をした父親と、なんとか戦隊なんかレンジャーのプリントがされているTシャツを着た少年が立っていた。俺もあんな少年だったな。父親は俺と電車に乗ってどこかに連れ出すのが好きで、動物園や博物館、イベントのやっている大きな公園など、休みになれば俺をどこかへ連れて行っていた。どこかに行った記憶はあまり残っていないが(父親とたまに話をする時に連れて行った場所の名前を聞くが、行った記憶があったのは今まで一度もなかった)、父親は肩を落とした)、父親と電車に乗った記憶はたくさんあった。俺は風景よりも周りにいる人を観察するのが好きで、家族連れや単独行動の若者や老夫婦など、毎回変わる人たちを見るのが大好きだった。立っている若者カップルは目の前の席が空いても一つだけしか空かないと座らないことや、老夫婦は優先席の考え方を区別すると2種類の人間がいて、優先席に座りたい人とそうではない人がいることも知っていた。また優先席に進んで座る若者、絶対に座らない若者、そもそも優先席付近には乗らない若者など性格が目に見えて分かるようだったので、とても面白かった。少年は今日の思い出を父親と話していた。二人は上野動物園に行ったようで、少年は大きな鳥がカッコ良かったと言ったが、あれはなんて言う鳥なの?という質問に父親は応えられなかった。どこにいた鳥だっけ?と言っても正門付近の鳥エリアは似たような鳥がたくさん並んでおり、少年がこの辺、と指差したあたりはどうやらその鳥エリアで、最終的には少年も父親もどの鳥なのか特定することができなかった。帰ったらパソコンで調べてみようかと父親は提案していた。そうか今はインターネットのおかげで、家には世界中から集められた膨大な図鑑を見ることができるのか。

再会

あっ、そうなんだー、結局やったんだー。圭太らしいね。俺、そうなると思ったもん。とコウタは言い、あまり驚いた素振りを見せなかった。まあ俺も普段からやりたいやりたいとさかりづいた高校生のようにつぶやいているのをコウタは聞いているので、別に不思議なことではないんだろうなというのが今の心境だ。ただ、一晩で何回もいったのは言えなかった。なんでかって？うーん、俺にもわからないな。さかりづいた高校生というのはリアルにそうだったのか、っていうのを知られたくなかったからかな。しかし、世の中には不思議なことがもうひとつ起きていた。

エイチとマコっちゃんが付き合っていた。

はやっ！なんだよそれ！どういうことだよ！結局俺だけかよ、何もなかったのは！とコウタは言った。残念、コウタ。と言ったエイチはニヤニヤしていた。月曜日の午前は仕事にならなかった。あまり仕事量も多くなく、クライアントからの承認事項がまだ解決されていなかったの、俺たちはそのおかげで、特にやることもなかったのだ。

エイチはもともとあまり口数の多い男ではない。実際にあの合コンでもあまり多くのことを喋ってはいなかったのだが、マコっちゃんはそんなエイチを気に入ったらしい。エイチも俺と同じくさかりづいた高校生だったようで、マコっちゃんは周りを気遣い、"そっと"連絡先を書いた紙をエイチに渡した。そこにはケータイのアドレスが記載されていて、エイチは合コンが終わってから速攻でメールをしたそうだ。「今日は楽しかったです。またお会いできたら幸いです」とエイチはメールを打った。実際のメールをエイチは俺たちに見せた。幸せですってなんだよお前、とエイチはコウタにツッコまれ、またそこでニヤついていたのがとても印象的なエイチは、ここからドラマが始まるわけですよ、と自ら体験したことのハードルを上げた。

エイチの話は、別に大変なドラマが用意されている訳ではなかった。というか、まだ恋人成立には至っていないでしょ？というのが俺とコウタの結論だった。

"そっと"メアドをもらったエイチはあの日、帰り際に早速メールをしたのだがマコっちゃんもエイチの「幸せです」という言葉に少し惹かれたようで、マコっちゃんからもすぐに返事が来ていた（几帳面にもエイチはそのメールまで俺たちに見せた）。マコっちゃんからは「エイチさんの幸せって平凡ですが魅力的ですね」という、どちらとも言えない内容だったが、エイチの中ではこの時点で脈があるように思えたという事で、まあエイチもポジティブな考え方のヤツなんだろうな、と思った。

翌日の土曜日は何も連絡をせず、日曜日になってマコっちゃんから「今日は何をしていますか？私は特に予定も無くのんびりしています。平日が忙しいから休日はゆっくりすごしたいですね」という文面だったがエイチは彼女の何を何も考えず「今日は中古CDを探しに来ています！良いのが見つかったら今度紹介します」というような内容だった。もっと押せば良かったのにさーとコウタは言う（俺も同感だった）、いや、ハッピーなドラマはゆっくり育てるべきなのです、とエイチは持論を展開した。

というわけでエイチとマコっちゃんはまだ付き合っている状態ではないのだが、お互いに気に入っているようだし、今後の展開に期待したい、という状況だろう。

マコっちゃんはエイミーマンやフィオナ・アップルなどのゆっくりとした女性ボーカルが好きだそうで、そこはエイチの範疇ではなかったため、お互いの音楽を紹介しあうのって良いですねという話になりつつあるそうだ。私のコレクションを紹介できる相手になるかどうか、ゆっくり見極めていきたいと思います、とエイチは言った。エイチ、おまえはなんでそんな上から物事を見るんだよ、とコウタはツッコんでいた（俺も同感だった）。

俺はというと、土曜日も日曜日もキョンちゃんと連絡を取らなかった。日曜日、あれから実は赤羽に行ってキョンちゃんに行った談にも寄ってみたのだが、アイドル雑誌のエリアにはキョンちゃんはいなかった。アイドル雑誌エリアは日曜日もしっかり少女たちがたくさん群がっていて、俺が近くに行くと明らかに不審そうな目をしてた。勘違いされそうだったので俺はすぐに退散した。その日はその後、小さな焼き鳥屋で何本かの焼き鳥を食べ、ビールを飲み、一人でとぼとぼ帰宅した。実は赤羽にいる間キョンちゃんのことをずっと考えていたが、結局キョンちゃんに会うことができなかった。

キョンちゃんにはすぐ会えるかなと思いつつ何度かメールをしていたが、あまり頻繁に返事はなく、会えたのは週末だった。週の真ん中くらいに東さんに相談したのだが、キョンちゃんね、平日の夜は忙しい人なので、会えるのはきっと週末になっちゃうよ、と言われてしまい、事実、その通りになった。平日、なんで忙しいの？とメールをするとキョンちゃんは会って話したいからといい、そして当日を迎えた。俺は彼女がジムとか習い事をたくさんしている人なのかと考えていたが、実際は違っていた。

彼女はサラッと行った。とてもサラッと。

私ね、新宿の風俗で働いててさ。ヘルスで。圭太くんならヘルスくらいわかるわよね？と言われ、俺は言い淀んでしまった。お金の困ってるの？と言うとそんな事はないと言う。昼間は歯科助手として赤羽にある歯医者で働いていて、定時の5時を迎えると、自宅のある赤羽からわざわざ新宿まで通ってヘルスで働いているとキョンちゃんは言った。

私ね、タッキーが好きでさ。ジャニーズの。タッキーを歌舞伎町で見た事があってさ。あの人、舞台によく出ていて、その稽古場が西新宿にあるっていう噂を信じて見に行ったら本当にタッキーが練習しててさ、舞台の。で、終わったら後をつけようと思ってたらタッキーはタクシーで歌舞伎町に乗り付けてね。グラサンと帽子をばっちりかぶってね。で、どこかに飲みに行くのかな、と思ってたらなんとヘルスに入って言ってさー。ビックリ。まァタッキーも男だしね、良く考えたらべつに普通な事だよな。で、私、そのままそのお店の面接を受けてさ。スレンダーな子を専門としていたのですぐに働くことができてさー。タッキーに会えたらやめようと思ってるんだけど、私、好みじゃないのかなあ。

ラブホテルのベッドで話す内容にふさわしくて俺は笑った。笑っちゃった。キョンちゃんがそれをあっけらかんと言うので、その感じにとっても好感を持った。

それ、いつ頃の話？

うーん、半年くらいかなあ。

その間、タッキーってお店に来たの？

それが良く分からなくてね。多分お目当ての娘がいるんだろうけど、その娘も店長も教えないんだ、タッキーが来たことを。

キョンちゃん、多分厳しいよそれ。指名してくれないんじゃない？

そんなのわからないじゃん！その娘がお休みの日とかさ、何かあるか分からないじゃん！

キョンちゃんは怒った。結構本気だった。俺はすぐに謝ったが、タッキーがキョンちゃんを指名するのはとても難しい話のように思えた。

エイチとマコちゃん

事実として書くが、前回より1ヶ月以上経った今でもタッキーはキョンちゃんを指名せず、だがキョンちゃんはタッキーを健気に待っていた。

俺はいつの間にか、キョンちゃんを応援するスタンスをとっていた。

キョンちゃんの機嫌をいい状態に保っておけば、またイチャイチャできると思ったからだ。男って単純だ。やらせてくれるのを知っていれば、自然に優しくなるものだ。それを見抜いているのかは分からないが、キョンちゃんは適度に気分を損ね、そして俺はいつの間にかキョンちゃんのシモベになっていた。キョンちゃんはそうなるのを計算し、俺を揜っているように思う。だが俺はそれがイヤではなく、むしろそれくらいのほうが心地良いことが分かった。お互い、気分が良ければそれで良いでしょ？

少しだけコウタと東さんのことを書こう。コウタと東さんの、あれから。

東さんはたまに、別れた元夫のことを気にかけるという。私が悪かったなどと言い、もしかしたら何かがトラウマになっているのかもしれないが、キョンちゃんはその度に東さんを勇気づけ、元気にさせるのだという。キョンちゃんは周りに困っている人がいれば話を聞き、そして元気を与えるのだと言う。確かにそういう雰囲気を持っているし、年の離れた弟を溺愛しているという事実を知ると、キョンちゃんに対して妙に納得するところがあった。

コウタと東さんは二人で良くランチに行く。特別な理由などはないが、気兼ねない友人同士という形式なのだろう。俺たちはそういう時、別行動をするようにしている。コウタは、いいよ、みんなで行こうぜ、というが俺たちにそうする権利はないと勝手に解釈している。

個性を発揮しようと髪型を変えたり、奇抜な言動を発したりしようとするじゃないですか。するとどうなるか。それを叩く人が増え、祭り上げようとする人が出てくるわけですよ、匿名と言う武器と共に。そんな個性が潰されてしまうような日本で生まれたスピッツは世界に誇れるバンドな訳ですよ。歌詞とか。

エイチは熱弁を奮う。俺とコウタはおそらく考えていることは一緒で、あれ、エイチってスピッツみたいな売れてるバンドもいけるんだ、と言うことだった。趣味は中古CDショップで眠っている音源を助け出すことだと言うエイチが、まさかスピッツを、とは想像できなかった。

俺たちは新宿に向かっていた。またあのメンバーと飲むためだ。あの、6人。それぞれに狙いがあり、それぞれはそれぞれのフォローするという約束のもと、新宿へ向かう電車に乗っていた。まるで戦場に向かう戦車のようなのだ。

コウタは東さんと仲良くなること。俺はキョンちゃんにちゃんと付き合おうと言い、それを周りに聞いてもらうこと。そしてエイチは、厳選したCDをマコちゃんに貸すことだった。その厳選したCDの中にスピッツのハヤブサが入っていて、それを訪ねたところ、冒頭の持論が展開された訳だ。

お店に着くと、既に3人は来ていた。

この定例な飲み会、なんだか楽しみなっちゃってるよ、私、と東さんは言うとかウタがすかさず、ですよええ、僕もこのために生活してるような感じで、と返す。

それは言い過ぎでしょ、と思いつつも東さんとコウタが少しずつ近づいていくのが見え、微笑ましくなった。

俺はキョンちゃんに告白するのを後半と決めていた。そのため、最初の数杯は何を飲んでも味を感じなかった。キョンちゃんは俺を見て笑っている。掘ごたつ式のテーブルで、俺の向かいに座っていたキョンちゃんは足の指先で俺の足に触れてきた。少しだけ下半身が反応してしまった。お、落ち着け俺。慌ててビールを飲んだ。

あ、この曲、好き。誰だっけ？ジャスティンビーバーですね、とマコちゃんの問いかけにエイチが返す。ジャスティンビーバーのような典型的なポップスは私は好きではないですね、というニュアンスがエイチの返答から見えた。

飲みは何事もなく続く。前回から今回までの間で起きたこと、見たテレビ、その中に出ていたお笑い芸人の話、そのお笑い芸人がいつまでもつか、などなど、他愛ない話がしばらく続いた。

キョンちゃんはたまに、俺の足に絡んできた。二人だけの秘密ね、みたいな顔がたまに可愛いわ。本気で好きになってしまったようだ。

キョンちゃんはエイチの一言一投足がすごく気になるようだった。エイチは珍しく何杯かの酒を飲み、饒舌に音楽を語っていた。ジャンルでくくることの無意味さ。ジャズの変遷。北欧の存在感。90年代ブリットポップのお祭りによってもたらされた虚無な文化などなど、幅広い蘊蓄をエイチは披露した。意外にもみんな興味深くエイチの話に耳を傾けていた。興味もなかった話だったが、時代背景などを丁寧に織り混ぜることによりひとつのエピソードがたくさんの背景に混ざり、みんなの心に染み込んでいった。マコちゃんは目をうっとりさせながら、右手にあったエイヒレをクルクルさせながら聞いていた。

一通り話が済んだところでエイチは満足し、マコッちゃんに渡す予定だったCDをガサガサとリュックから出した。ディスクユニオンの黒いビニール袋には3枚のCDが入っていて、スピッツ、クーラシェイカー、そしてさっきマコッちゃんが好きと言ったジャスティンビーバーが入っていた！エイチ、すげえ！お前はマジシャンかよ！とコウタは驚いて大きな声を出した。キョンちゃんも奇声を上げて驚いていた。だが種明かしはとても明快で簡単なものだったが前回の飲みでマコッちゃんが言っていたんですよ、とエイチはバラした。しかしマコッちゃんも覚えていないようで、結局はみんなで驚いた。俺は前の店の雰囲気を覚えていて、確かジャズばかりが流れていたのがジャスティンビーバーがBGMで流れるのはおかしいだろ、と気づいてしまったが、きっとエイチがどこかから情報を仕入れたのだろうと思い、そのことについては触れなかった。

エイチの見事な演出により、俺は言うタイミングを逸してしまった。エイチが思いの外よく喋り、時間もだいぶ経ってしまった。俺は、今日は無理かな、と思った時、コウタが、あれっ、圭太もなにか言いたいことがあったんじゃないかなって俺を促した。

コウタ、お前、いい奴だけどタイミングを読まないよな。俺は苦笑した。

東さん

マコッちゃん、良かったら明日、一緒に日比谷公園に行きませんか？

エイチがマコッちゃんに尋ねる。聞くところによると明日、ビールフェスタをやるそうで、その内容を聞いたときにはマコッちゃんよりも東さんが乗り気だった。東さんはビールが好きだ。

いいなあ、私も行きたいけど邪魔しちゃうよね、と東さんが少し寂しげだったので、俺は助け船を出した。さっきのお礼だ。

あ、それならさ、コウタが東さんを誘えばいいんじゃないの？で、ぼったり向こうで会えばいいんだって。名案でしょ、これ。

コウタは照れていた。決して余り物ではない二人は、どちらも照れていて、見ていて初々しさを感じた。

結局4人は行くことになった。残るべき俺たちは、まだどうするか話し合っていなかった。付き合い始めて最初の週末だ、できれば二人でいたい決まっている。俺はそう思っていたが、その思いはどうやら片想いだったようだ。

ん、それなら私たちも一緒に行くよー。キョンちゃんはあっけらかんと応えた。こうして、翌日も俺たちは会うことになった。

いつの間にか、俺たちはひとつのグループを作り上げていた。こんなに仲良かったっけ？とマコッちゃんは言った。そうだよねえ、あっという間に仲良くなっちゃったよね、と東さんが応える。

だが東さんは来なかった。急に用事ができてしまった、とても楽しみだったのに申し訳ないという趣旨のメールがマコッちゃん宛に今朝、来たという。これにはコウタだけではなくみんなが残念がっていた。それぞれがカップルになりつつはあるものの、やはり6人で集まるというところに大きな意味があると思うのだ。それはみんな同じだった。中でもコウタの落胆ぶりはひどく、最初は声もかけられないほどだった。まあ、急遽決めた週末の予定だし、しょうがないよ。きっと東さんはもともと予定が入っていたんだけど、それを変更するのが難しかったんだって。俺はコウタに声をかけた。さ、どの国のビールを飲みに行く？キョンちゃんも空気を讀んだようで、気分を紛らすようにした。

ビールフェスタでは各国のビールを販売していた。多くのお店では瓶に入ったビールを販売し、飲み終わった瓶はもとに戻すというスタイルをとっていたが、気に入った瓶を持ち帰ることができるそうで、持ち帰りたい場合は持ち帰り申請所でどの瓶を持ち帰るか申請をしなければいけないという。面倒なシステムだな、と思っていたがその申請は銘柄名と本数を記入するだけで個人情報は一切記入する必要がないそうだ。その情報はただ、ビールフェスタ最終日にある催しのために使われるそうで、持ち帰り本数が一番多かったビールを選ぼうという趣旨のものによるものだった。俺たちはまず、ニュージーランドのビールを選んだ。スパイツというビールで、オレンジのラベルがとても可愛らしかった。キョンちゃんはそのラベルが気に入ったといい、持ち帰ることを決めたようだ。肝心の味もまあまあで、とても軽いため何本も飲んでいられそうな感覚だった。

その後俺たちは銘々に各国のビールを体験した。自由に座って飲めるスペースが非常に広く、俺たちはひとつのテーブルを占有し続けたが、何も咎められることはなかった。

だいたい2時間くらいすごし、5人はだいぶ落ち着いてきた頃にコウタが言った。コウタは当初こそ沈んでいたが、ビールを飲み始めてからはだんだん打ち解けてきていた。

東さんね、元夫がしつこいんだって、最近。俺たちと飲むようになってきてさ、もうとっくに離婚済みなのに元夫は相変わらず夫な気分らしくてさ、週末もしょっちゅう東さんが住んでるマンションに来るんだってさ。

その後もコウタは喋り続け、今東さんがどんな状況におかれているか、なんだか全然気づかなかったよ、東さん、ポーカークフェイスなんだな、くらいしか思い付かない俺の頭は何か

狂ってるんじゃないかとおもった。

結局東さんは来れず、夜になってこっそりとキョンちゃんのケータイにメールが来ていた。

一言で言えば、よくある話なのかもしれない。元ダンナがストーカーに変わり果て、既に他人になってしまった元妻の行動を監視しているそうだ。元夫は相変わらず定職に就かずフラフラとしていて有り余るほどの時間を東さんのために使っているのだという。そのため今日のビールフェスタにも来れず、マンションの外に潜んでいる元夫にビクビクしながら家から出ずに引きこもっていたと言う。頭はあまり切れる方ではないよう盗聴機などはしかけるほどのことはしないだろう、ということだがあまり長い間悠長に構えているのは難しいだろう。東さんが被害を受ける前になんとかしなくては、俺とキョンちゃんは困っている友人のため、そしてその友人のことを好きな友人のために、何ができるかを考えた。

私さ、うまい具合に近づけないかな、そいつをうまく呼び出してどうにかしちゃたいわ。

推理小説すらあまり読まない俺たちは、効果的な方法を知らなかった。

こういう時って、私、やってみる、とか言って名案が浮かぶものだよ、小説とかだと。やっぱ私たち、凡人だねー。

そりゃそうだ、俺たちは小説だって書けやしない。名案なんか浮かばないのは明白だった。

もうさ、こうなったら強行手段しかないんじゃない？本人の前に行って、もういい加減にしてくれ、東さんは困っているんだから、って言うしかないような気がするよ。俺は言った。知恵がないなら汗をかけ、だ。

俺たちはコウタに電話をかけ、一緒に元夫のところにいこうと言おうと思った。電話は4コールほどでコウタにつながり、遠くからコウタの落胆したような、しかし焦っている声が聞こえた。

俺たちは耳を疑った。俺がコウタから聞いた内容を話すと、キョンちゃんの目が急に潤み出した。とにかく急ごう。俺たちは二人とも裸だったため急いで支度をし、東さんが運ばれた病院へと急いだ。コウタはその病院にいた。

東さんは車にはねられたと言う。最悪の事態が起きてしまった。元夫が運転するレンタカーに、東さんは、ひかれた。元夫はその場で救急車を呼び、一緒に来た警察に逮捕された。余りにも展開が早く、しかも飛躍しすぎていて俺たちは現実を直視できなかった。

コウタは泣いていた。一人で、東さんが助かるのを待っていた。俺たちが到着すると、コウタは俺に抱きついてきた。一人で不安だったのだろう、コウタの身体は震えていた。

大丈夫、大丈夫だからコウタ、まずは落ち着こう。キョンちゃんもコウタの雰囲気を見て怯んでしまい、しまいにはキョンちゃんまで泣いてしまった。

東さんの両親は実家のある静岡から車でこっちへ向かっているのだと言う。コウタは、直前まで東さんと電話をしていたそうだが、東さんの発信履歴からコウタの携帯電話に連絡があり、そこから今に至る、ということだ。コウタは東さんの携帯を預かり、両親に電話をかけたと言う。

しばらくしてからエイチとマコっちゃんが一緒に到着した。二人でCDショップにいたそうで、コウタの焦りっぷりに普段は落ち着いているエイチもさすがに驚いたと言う。

そこからどれくらい待ったのだろう。全員が、同じことを考えていた。また一緒に集まってくだらない会話とおいしいお酒に溢れた、あの楽しい場所へもう一度行きたいと思った。

専門学校に通っているうちからね、あの男には近づかない方がいいって言っていたんだけどさ、東さん、なんか知らないけどずっと一緒にいたんだよね。根が優しいからかな、あの男は東さんのそんな性格を利用したんだよ。散々金をせびってさ、自分は定職にも就かないし、もっと早くコウタ君が奪ってくれなくちゃダメだったんだよ。遅かったよ、コウタ君。

マコっちゃんか話を続ける。

あの男、私たち女だけで飲む時はなんともないんだけど、近くの大学で一緒にサークルやってたメンバーとかと飲んだ時はひどく怒るんだって。どうして他の男がいるところに行くんだって。そのうち、私たちも東さんを誘うのに気が引けちゃってさ、決して仲間外れって訳じゃ無いんだけど、東さんはその男のためにバイトしてばかりだったので私たちとは専門学校時代の後半はあまり一緒にいた記憶が無いのよね。東さん、学校だけが楽しみだったみたいだったな。あの男はあっという間に学校に来なくなってさ。

マコっちゃんが一通り話し終えると、頬を涙がついた落ちた。

だが、東さんは両親の到着を待たずに逝ってしまった。

コウタの告白さえ待たずに。

どこの馬の骨かも分からない男と勝手に結婚して、終いにはそいつに殺されるなんて、なんて親不孝な娘だったんだろう。

葬儀で喪主である父親がしたスピーチは、元夫に対する怒りや恨み、冒涇ばかりだったとマコっちゃんが言っていた。葬儀は雨の中、とても静かに執り行えたと言う。

その話を聞いた時、コウタは泣いていた。コウタは自分を責めていた。もうダメだ、俺には生き甲斐がなくなってしまった、と半ば自暴自棄になっているコウタには誰も、声をかける事ができなかった。

人生は儚い。なんてセリフを30の俺が言うのも気が引けてしまうが、こうして近くにいた人間が死んでしまうと、ついそんな事を考えてしまう。東さんは東さんの人生を歩んだのだろうが、その人生の最後に過ごした日常に俺たちがいた事を思うと、なんだかやるせない気持ちになってしまう。

それからしばらくは5人で集まる事がなかった。雨の季節を過ぎ、蝉が鳴くのをやめ、月がとても美しくなってきた頃、そろそろ一度会おうか、という話が持ち上がり、俺たちは初めて出会ったあのお店に集合した。発端は、東さんが喜ぶだろうからといういかにも独りよがりな理由だったが、それに反対するものはいなかった。

男同士、女同士では会っているのだが、こうして集まるのは東さんを看取ったあの病院以来だった。その事を話すと、ついさっきのような気がした。人生が儚いと思うのは、こういうところからだろうか。

実はその間、エイチとマコッチャンが付き合い始めていた。彼らはすすくと愛を育んでいた。マコッチャンがエイチを、東さんのお墓参りに行こうと誘ったのが発端で、静岡の西の方にある其の場所に行くには小旅行のような旅路が必要だったが、マコッチャンが一人で行くのは気が引けたからだと言う。マコッチャンはキョンちゃんを誘おうと思ったのだが、間違えてエイチに電話をかけてしまい、間違えたのを正すのも面倒臭かったのでそのまま、エイチを誘ったという、なんと言うかマコッチャンにしては珍しく浅はかな決断だった。

お前らさー、楽しくイチャついちゃってさ、なに、俺にケンカを売ってる訳？いちいち見せつけるようにしやがってさー。だいたい俺だつーの、こうなる発端を作った合コン、セッティングしたの。コウタが荒れている。生き甲斐を無くしたと自暴自棄になったのを相変わらず引きずっているコウタがこうなってから、半年以上経っている。そう言いながらも会社には入社し続ける事を立派だね、という、仕事ですから、というコウタは立派だ。

東さんが働く姿を見せなくなってから半年以上経つ。その間にいろいろ変わったというと少々書き過ぎだろう。大きな事は何も変わっていない。エイチとマコッチャンは相変わらず仲良しげに付き合っているし、俺とキョンちゃんは持筆すべき事が何も無いくらい落ち着いてしまったが、まあそんな感じだ。確かにコウタがきっかけとなり付き合い出した2組だったが、狙う相手を失ったコウタがとても不憫だった。誰か他にいい人がいれば、とキョンちゃんと一緒に考えた事もあるが、風俗嬢なら何人か、という程度であまりいい状況とは言えなかった。それでもいいなら、と俺はキョンちゃんの仕事仲間会って見たが、コウタが付き合いたいとは思えなかった。

時間が解決すると思っていたコウタだったが、その後は更に悪化していたようだ。だんだん俺たちとも工作中に話をする事がなくなってきており、早退的に鈍感と思われていたエイチですら、コウタの心情変化に気づき、何かした方が良いですかねえ、と言わせたほどだ。日に日に俺たちの隙間は大きくなっていった。だが俺たちはなす術がなく、ただただその隙間を眺めているだけだった。隙間を埋めようと思わない俺たちは、結局何もできない子どものようだった。

俺はキョンちゃんにその事を何度か話していたので、キョンちゃんもそれなりに何かを感じ、そして何か行動を起こしたいと思ったようだ。

もう既にタッキーに会うことは目標から外れ、風俗で働いてからずれた金銭感覚を保つかのように、キョンちゃんは夜の仕事を掛け持ちし続けていた。お店に行って嬢たちに癒してもらおう？というアイデアは既に何度も俺たちの頭上をかすめ、結局実現することはなかった。そんな事をしてコウタに見透かされるのが関の山だ。女絡みの方法は結局一時的なもので、コウタの心の中にある東さんが存在していたところにある大きな穴を埋める事はできないと考えていた。既に考え尽くしたと思うと、俺たちの頭がひどいボンコツのように思えてならなかった。

私たち凡人だもんね。東さんを助けなきゃいけない時だって、結局何もしてやれなかったし。私たちだって、マコッチャンたちだって、そしてコウタ君だって凡人なんだよ。なーんにもできないの。なーんにもできない。ご飯食べて、セックスして子どもを作るだけ。それが人を助ける訳ではないし、結局は自己満足でしかないの。勝手だよ。本気でコウタ君を救いたいと思ってるのかすら、怪しいよ、私たち。

おい、ちょっと待て、その言い方はないだろう、と俺は噛み付いた。

親身になればね、アドバイスの一つくらい思いつくでしょ！なのに結局、東さんやコウタ君になんにもできていない！コウタ君だってそう感じているはずだよ！マコッチャンたちだってみんなそうだよ！

キョンちゃんは慌ててバッグを掴むと、家を出て行った。俺は、追いかけてはしなかった。流される訳ではないがキョンちゃんのいう事が全く筋通りだと思うとやるせなくなり、家を出る事ができなくなり、そのままベッドに倒れこんだ。分かってる。分かってるけど、何もしてやれないんだ、コウタに。

俺たちは虚無感に苛まれ、前が見えなくなっていた。キョンちゃんとのセックスも半年を超えてマンネリ化し、何をしても気持ち良くなれず、ただ今までの習慣をこなすだけだった。

現実が楽しくない。今年はずっとそんな感じだ。東さんが亡くなってからずっと、楽しいことなんて一つもなかった。このまま2010年も終わりを迎えてしまうのか。そう思うと忘れられない一年だったな、とまだ師走にもならない11月中旬頃、俺はぼんやりと考えていた。

事態が急変したのはその師走に入ってからだ。12月に東さんが誕生日を迎えるので、5人でお墓参りに行こうとマコッチャンが企画していた。コウタと俺たちの間には相変わらず海溝のような深い溝ができていたが、俺たちは勇気を出してコウタを誘った。意外だったが、コウタは一緒に行くことを快諾した。さっきの話さ、俺、一緒に行ってもいいのかな、とコウタは遠慮がちに言ってきた。そう来なくちゃ。むしろお前が好きだった人なんだから、お前が企画するくらいじゃないと東さんが喜ばないんじゃないのか。そ、そうかな、そんなことねえよ。結局俺も一緒に行くんだからいいんだよ、東さんも俺が行くことをきくと喜んでくれる

はずだよ。

そこから当日まではあっという間だった。新幹線じゃなくて車で行こうぜ、どうせ新幹線だったらお前たちはペアで座るんだろ、俺はどうせ一人になっちゃうんだからさ、ワガママ聞いてくれよ、俺の。コウタは車で行くことを強く主張した。新幹線で行くには別に大きな理由もないので俺たちはコウタのワガママを聞いてやることにした。

車は大きなワンボックスカーを借りた。エイチの父親が同じものに乗っているそうで、それならエイチも運転ができるからだということだった。誰が運転できるか、俺は心配だったが案外みんな運転したがりで驚いた。

東さんの両親へはマコちゃんか前もって電話をしていたせいで、東さんの実家についたときには俺たちは大袈裟に歓迎された。東さんがいなくなって半年以上が経っても、寂しいのはコウタや俺たちだけではない。ここにいる東さんの母親だって寂しいのだろう、俺たち以上に。東さんの母親は俺たちに、東さんの思い出話を長々と語った。ここに書くとそれだけで一冊の本になってしまうようなボリュームなので俺の心に秘めておくと、当然だが俺たちは出ていない話ばかりだったが皆それぞれに興味深そうに聞いていた。ハキハキしているイメージは専門学校に行ってからだそうで、高校まで内気で地味な女の子だったそうで、結婚は晩婚だろうなあと両親は諦めていたと言うのが一番驚いた話だった。

専門学校の話をするるとつい元夫のことが頰を掠めてしまう。それはみんな一緒だったので、自然とその頃を避けて話をするようになっていた。キョンちゃんとマコちゃんはそのときの友達なのだが、二人はそれすらも感じさせることを厭わせるような、そんなピリピリした雰囲気だ。東さんは一人っ子で、両親がいくら明るく振舞っても、その重たい雰囲気は払拭されないのだった。ちょっと俺、散歩してきます、その辺。東さんがどんなところで育ったのかを詳しく知りたいし。コウタはそんな両親を見ているのが不憫だったのか、自らその場を離れようとしていた。ただそれはその雰囲気を乱すものではなく、東さんの母親は、寒いから気をつけてね、とコウタの背中をそっと押した。もしかしたら義理の親子になるかも知れなかった二人。そう考えるととてもさみしくなった。お前も来いよ、圭太。コウタは俺を呼んだ。お、おう、と不意をつかれたが俺も一緒に行くことにした。

コウタとはほとんど何も喋らずに歩いた。少しコミュニケーションに支障が出ているように見えたコウタだが、東さんの両親と話している間はあまり違和感はなかった。だが東さんの両親と同様、コウタも辛いのは良く分かった。

東さんが住んでいた家の裏に県立高校があった。高校の周りに、高校を一周できる外周が走っていて、東さんが高校の頃に飼っていた犬と良く散歩をしていた、と母親が行っていた。一応車は通れるが俺たちがぐるりと一周している間、車は一台も通らなかった。ススキが所在なげに佇み、時々吹く風になびく。朝、東京を出てきたが、あたりはすっかり夕方になってきた。そろそろ帰ろうか、東京に。俺は行った。

家に戻っても母親の東さんとの思い出話は続いていた。東京から友達が来たのは初めてだったのでとても嬉しかったのだろう。父親はそんなにはしゃぐ母親を見たのは久しぶりだ、と言った。

暗くなる前に出るつもりでした。そろそろ失礼させていただきますね。ありがとうございます。俺たちは示し合わせたように言うと、案の定だったが、母親は俺たちが帰る事を渋った。父親と二人になって現実に戻るのが怖いのだと言う。せっかく東さんとの思い出をたくさん話し、もう少しその気分に浸っていたい、だから泊まって行って欲しいのだと言った。俺たちは困り果てたが、コウタが、俺一人でもいいですか？と両親に話し、お前たちは先に帰れ、俺はもうちょっと東さんのご両親と一緒にいるよ、どうせ明日も用事なんてないし。と言った。東さんの母親は嬉しそうな、けど少し申し訳なさそうな顔をした。

帰りの車の中で、実質付き合っている、もしくはいい感じに進んでいるカップル同士になった訳だが、あまり浮ついたテンションにはなれなかった。すでに暗くなっている事、そして高速道路のインターチェンジまでまだまだある事、東さんの勧めを断った事など、なんかいろいろとあって気分が浮かばないのも当然だろうな、と皆が思っていたはずだ。そしてその空気を変える事、その必要すらもないのだろう。皆、静かに、前を見ていた。恐らく、疲れたのだろう。

どこか、ファミレスでも寄って行かない？沈黙を破ったのはマコちゃんだった。いいねそれ、賛成。同じく疲れ果てていたキョンちゃんもその提案に乗った。女性陣が勢いついたので、男性陣に何かを言う権利はなく、運転していたエイチと助手席にいた俺はファミレスを探しながら車を先へ進めた。

インターチェンジへのナビが何度もルート変更をしていた。俺たちはインターチェンジを目指す事を諦め、ファミレスを探し続けていた。国道1号線を走り続けていたが、静岡を越えてからは海と山の間を縫い結ぶエリアに入るため、やっとのことで見つけたファミレスは沼津に入ってからだった。掛川を出たのが夕方くらいだったのだが、ファミレスに入った時は既に8時を過ぎ、もうすぐ9時になろうとしていた。は一、疲れた一、と最初に言ったのはエイチだった。エイチは東さんの実家からここまでの数時間を、全く休憩せずに走り続け、更にファミレスを見続けながら走っていたので余計に疲れただろう。皆一様に、エイチを労った。

ファミレスでめいめいに食事をし、何杯かドリンクバーでお代わりをしているうちに、東京に戻るのか面倒になってきた。今日は

どこかに泊まって、レンタカーは明日返そう、その際にかかる余計な料金はワリカンをすればあまり大きな額にはならないだろう。ただだだダルかった。結局俺たちはそこで数時間を過ごし、もう少しで明日になってしまう時間になった時、俺は近くにラブホテルがある事を発見した。泊まって行こう、2部屋空いていれば。

俺は提案した。エイチとマコっちゃん二人の空気が張り詰めたのを俺は確認した。

運良く2部屋が空いていたラブホテルはファミレスからは車で10分くらい走ったところだった。俺たちは(実質はキョンちゃんと俺だったか)携帯電話で近くにラブホテルがあるかを検索し、手当たり次第に電話をした。いくつかのホテルはWebにあるホームページ上に使用状況が書いてあり、電話をするまでもなかった。誰かが部屋に入るだけでホームページの後ろにあるデータベースが更新されるのだろうか、一見画期的に見えるシステムだったが、俺はどう動いているのかが気になった。まあ、どうでもいい話ではあるが。

ラブホテルの話をした時にキョンちゃんと俺は気付いたが、二人はまだやっていなかった。プラトニックな恋愛を続けていたのだ。なんだかごめんね、こんなムードのない場所、時間で。キョンちゃんは二人に謝った。二人は、それに応えられるほどの余裕がなかったようで、手元にあったドリンクバーのグラスやストローが入っていた長細い袋を弄んでいた。

地方のホテルはね、皆こんなもんだよ、とキョンちゃんは言っていたが、ラブホテルの上には偽物の花火が上がり続け、隣にあったホテルの屋上には自由の女神がいた。車を止めホテルに入ると、受付には老婆がいた。電話をした旨を伝えると、旅行?ちゃんと宿くらいとってあげないと、奥さんたちスネチャうよお、と余計なお世話発言をしていた。部屋は隣同士ではなかったが同じフロアにあり、俺は修学旅行を思い出した。部屋がある5階まで上がると、それじゃあまた明日、といい俺たちはそれぞれの部屋へ向かった。今日は朝も早い時間から行動をしたし東さんの母親の話を書くのも結構大変だったしで既に眠かったが、二人でシャワーを浴びるとバスルームでキョンちゃんが俺を求めてきた。なんか猛烈にしたくてさあ、と言いながらキョンちゃんは自分の胸に俺の手を導いた。俺はそのまま下も触ると下は既に濡れていた。俺たちはシャワーからお湯を出したままお互いの身体を求め続け、もうダメ、とキョンちゃんが言ったところでその手を止め、身体を拭くのが面倒だったのでバスタオルをベッドにひき、その上に寝そべった。

枕元にはバイブなどの玩具が売っている小さな自販機があり、それをキョンちゃんに言うと、キョンちゃんは使いたいと言った。店ではオプションにあるそうで、既に使い物にならないモノを持ったご老体やそのテの病気の人がそのオプションを使い、キョンちゃんをイカせるのだと言う。それを圭太君にやってもらいたいのだ、と。他人とのセックスをしている話を堂々とされることに若干の違和感を感じつつも、俺たちはそれを購入し、コンドームを付けて既に受け入れ態勢が整っているキョンちゃんの中へ挿した。くっ、とかきっ、とか言葉にならない声を出し、キョンちゃんは反応する。もっと良く、見て、くれる?キョンちゃんは俺に言った。ん、どこ?し、し、下を、とキョンちゃんは言った。新しい感覚だった。見られるのが好きだなんて知らなかった。俺は部屋を明るくした。今までの経験からすると部屋は暗くするのが常識だと思っていた俺は、やる時はいつも部屋を暗くするし、昼間の場合は律儀にカーテンを閉めていた。俺はキョンちゃんの望み通り、部屋に蛍光灯を灯し、キョンちゃんの下を、キョンちゃんの望み通り、見た。良く見た。別の生き物のように、という引用句をどこかで読んだことがあったが、まさにその通りだった。紫色でとても歪な形をしたバイブを、身体中から集約させた粘液を総動員し、キョンちゃんは受け入れている。キョンちゃんの顔は紅潮している。そのままいつまでもキョンちゃんは感じ続けられそうだったが、俺はそのバイブを引き抜き、俺のを生で挿入した。一瞬のことだったのでキョンちゃんは始め、挿入されているものに気づかなかったが、キョンちゃんの上に俺がいるのを見た途端、自分の下を触り、状況を把握した。疲れているせいかイクまでにいつもより時間がかかったが、それをキョンちゃんは俺が焦らしていると思ったのか、よがり続け、俺はそのまま、キョンちゃんの中でいった。

ホテルの天井には青空が描かれていた。丸くてシンプルなシーリングライトだったらそれを太陽とみなし、絵に描いたような空を想像することができるが、シーリングライトは煌びやかで安っぽい、シャンデリアだった。青空が台無しだ。キョンちゃんはコンビニで買った烏龍茶を飲んでた。俺は冷蔵庫からどこにでもあるのにこっだけ500円で販売されている滋養強壯ドリンクを飲み、2回目を始めようとした。さっき使ったバイブを包んでいたコンドームはまだキョンちゃんの粘液がべったりとついていた。

シャワー浴びてくるわ、私。キョンちゃんはバスルームに行こうとした。なんで?もう一回しようよ、いつものように。俺はいつもの習慣だろ?なんで今日はいつもと違うんだよ、と言う言葉を背景に潜ませたまま、キョンちゃんに言った。だって生でいったでしょ圭太君、私、妊娠中するのイヤだもん、まだ。キョンちゃんは言った。お、そうきたか。確かに生でいったのは初めてだったが、気持ち良さを優先させたのでその後のことは何も考えてなかった。ダメ男の典型だ。キョンちゃんの顔にはさっきまでの乗り気な表情はすっかり抜けていた。その後キョンちゃんはしばらくバスルームから戻ってこなかった。そのうち、俺は裸のまま寝てしまった。

キョンちゃんも俺も朝は弱かった。目覚めた時、時計は9時30分に差し掛かろうとしていて、携帯電話を見ると俺はエイチから、そしてキョンちゃんはマコッチちゃんから何度も着信があった。キョンちゃんは慌てて電話をすると、マコッチちゃんは出なかった(後から聞いた話だとその時二人は待ちくたびれ、やることなく、ベッドでゴロゴロしているうちに服を脱ぎ始め、やっていた最中だったそうだ。彼らもケモノだ。)ので、少しゆっくり支度を整えた。キョンちゃんは少し機嫌が悪そうだった。俺はいたたまれなくなり、ゴメン、もし出来ちゃったら一緒に育てようと言った。キョンちゃんは何も言わなかったが、俺を見定めるように見た。そんな簡単に言うなよ、状況が理解できているの?と顔に書いてあった。俺は浮かべられない気持ちになった。

それでもキョンちゃんはエイチたちに再会すると、昨日までの元気な表情を見せた。エイチとマコッチちゃんも、元気そうだった。4人とも空腹だったので、マクドナルドに入った。日曜日だったがまだお昼前だったので客もまばらだ。外にある遊具にもまだ子どもたちはおらず、早く遊びにきて!と遊具が子どもたちを待っているような気がした。4人はそれぞれに注文し、2階のテーブルに座った。2階も、まだガラガラだった。

私、高校の時にマックでバイトしてたんだよね。マコッチちゃんは言った。親が警察官だと聞いていたので厳しい家庭だったのかと思ったが、それは俺の勝手な想像だったか。俺はそのことを聞くと、親はマクドナルドでなら働いても良いと言ってくれたそうだ。一般的に教育体制もしっかりしているし、家からも近く、また両親はお金を稼ぐとすることを早い段階から学ぶことを歓迎していたので、マクドナルドでバイトすることを快諾してくれたそうだ。

だけどね、中に入ったら高校生と大学生が付き合うとかそんな話ばかりでさ。私も近くにあった大学に通っている人と付き合っているのがバレて、バイトをやめさせられちゃってさー。とても優しい彼だったんだけど、どこかでバレちゃったんだよね、懐かしい。

その後もマコッチちゃんはマクドナルドの思い出を語った。総括すると出会いには事欠かない場所で、しかもみんな気が合う人たちがばかりが仲間になるそうなので、とても楽しい思い出の一つだと言うことだ。マコッチちゃんの話聞きながら頼んだものを食べ終え、俺たちはお路路に向かった。

帰りはとてもスムーズだった。帰り、事故が起きなければスムーズに帰れると思うから、無事で帰れることを祈っていますと東さんの父親が言っていたのが遠い昔のようだった。コウタはもうこっちに向かっているのだろうか。コウタ、まさかそのまま静岡のあたりをぶらついてしばらく帰って来ないんじゃないか、俺はふと、そう思ったが、現実的ではないと感じ、口に出すのはやめた。後ろの席ではキョンちゃんとマコッチちゃんが眠っている。とても気持ちの良さそうな寝顔だった。エイチは今日も運転係だ。

お前、昨日、やったの?

はい、そういう所に泊まったから当たり前じゃないですか?

どうだった?

そ、そんなの緊張して覚えてないですよ、と言うか私が言う必要ないじゃないですか?

エイチは逆に質問をしてきた。そりゃそうだ。だが明らかにエイチは嬉しそうな顔をしていた。俺は、二人になるのが少し怖かった。

翌日、コウタは普通に出社していた。俺の予想は見事に外れ、そんなドラマみたいなことは起こらねえんだよ普通、とコウタは言った。元気そうだった。と言うか、元気を取り戻したのだった。

親父さんとさ、あの夜、飲んだんだけど。本当はね、どんな男でもいいから連れてきて一緒に酒を飲むことを願っていたそうなんだ。けどさ、雰囲気的に駆け落ちみたいな構図になっちゃって、時期がくれば許してやろうと思っていただけでそんな間もなく離婚、そして帰らぬ人になっちゃったって訳で。もう何が良くて何がダメなのかがさっぱりわからなくなっちゃったそうなんだ。それもそうだよ。で、まあ俺が息子みたいなものだと思って飲みましようよって言ったら親父さん、涙を流して喜んでくれてさ。なんか俺、ウチの親父は銀行マンでほとんど会話なんてしてなかったから、急に親父の持つ暖かさに触れたような気がしてさ。そのまま一緒に風呂に入ったんだ。笑っちゃうでしょ。東さんがいたらその場でプロポーズして、俺、あの家にずっと住もうと思うくらい気分が良くてさ。風呂から出た後もチビチビ飲んだんだけど、お袋さんが寝た後にさ、実は俺、東さんの事が好きだったって言ったら、また親父さんが泣いちゃって。思わず俺ももらい泣きしちゃったよ。親父さん、生きる希望を見失って困ってたんだって。東さんが平凡な結婚をして、可愛い子どもを二人くらい産んで、その孫たちに囲まれながら平凡に死んでいくのを望んでいたのに、それが叶わなくなってしまって、とても辛かったって言ってさ。いい親持ってたよ、東さん。自分の本意ではないけど、本当、俺が助けてやればなあって、すげえ思ったね。もうどうしようもないけどさ。

コウタは晴れやかだった。自分の気持ちを打ち明けたのが素直に気持ち良かったのだろう。打ち明けたところで結局何も変わらない事って世の中にはとても多く存在するが、それでも人の心を暖めるものになれるのであれば、結果的には何も変わらなくてもいいんだろうな。俺はコウタの横顔を見ながら感じた。

ところで圭太、キョンちゃんって昼間は歯科助手やってるんでしょ？で、夜も何か仕事してるんだって？すごいね、よくそんな体力が持つわ。

コウタは話題を切り替えた。誰からそんな話を聞いたのだろう。コウタに教えた意図すらも分からなかった。

そうだよ、働いてるよ。誰に聞いたの？

俺はそれとなく聞いてみた。

え？本人だよ本人！しかもさ、あっちの方なんでしょ？やっぱアレとか、すげえの？

コウタはとても下衆な事を俺に聞いた。まあ、男なんてみんなこんなものだろう。俺の友人がそんな彼女と付き合っていると聞いた場合、おそらく同じ質問をその友人にはなげかけるだろう。ああ、そりゃあもうすげえよ。こっちがビビるくらいすげえ。テクニックがね、もう半端ない。俺は適当にあしらった。比較するほどの経験を持ち合わせていないので、キョンちゃんがどの位すごいかわからなかったが、とりあえずコウタの期待を裏切らないように答えた。

へえー、やっぱやるねえー。おまえ、羨ましいわ。

そしてまたコウタはすごい事を言った。

今度さ、その店、行ってみない？今週末あたり、キョンちゃん、出勤してんの？

な、何を考えているんだろうか、コウタは。俺は答えに窮した。

べ、別にいいけど、働いてる店、M女ばかりだけどいいの？お前、Sだったっけ？Sじゃないと面白くないってよ？

俺？断然S。もうノリノリでSだよ。

コ、コウタ、なんでそんな乗り気なんだ一体。

最終的に俺は断り切れず、コウタと一緒にいく事になった。

キョンちゃんに話すべきか、俺はすごく悩んだが、何も話さずに決行当日の金曜日を迎えた。今日はキョンちゃんも出勤する日だ。金曜日はだいたい出勤しているので、俺は夕食を自宅で一人で食べ、来るべき週末に向けて嬉しさと共に一人で眠るのを日課としていたので、その喜びが遮られるのは仕方ないと思ったが、コウタの余りにも高いモチベーションに俺は負けた。

会社を定時で終え、適当に飲んで食べ、ブレスケアと共に俺たちはキョンちゃんが働く店に向かった。風俗の無料案内所経由で行った方が安く済むと言うので、俺たちはそこから空き状況を確認してもらい、そこで働いいかにも甲斐症のなさそうな男に店まで連れて行ってもらった。男は俺たちを店の前まで送ると、良い夜をお過ごしください、と深々とお辞儀をした。その、変に律儀な感じがとても気持ち悪かった。コウタはニヤニヤしながら店に入る。

店の中は暑かった。年の瀬に迫っている時期ではあるが、店内はかなり暑かった。偽名を使い、金を払う。こんな金が、キョンちゃんの財布に入るのだろうか。少しやるせなくなった。家に帰ればタダでできるのに。40分で18000円でという金額は決して安い金額ではなかった。それは俺もコウタも一緒だろう。店員は金を受け取ると、指名できる嬢が貼ってある壁面を指差した。この時間はBにいる子たちだけになります。嬢は大きく4つのグループに分かれ、それぞれが交代制で働いているようだった。キョンちゃんは、Bにいた、ように見えたが、結局どれがキョンちゃんなのかは凝視してみないと分からなかった。俺たちは適当に選び、嬢が迎えにくるのを待った。待合室には俺たち以外にも何人かおり、みんなスーツを着ていた。俺が週刊漫画を適当に開いていると、スーツを着たサラリーマンたちを迎えに来た嬢たちが俺たちを一瞥した。早く来ないかな、待ち遠しいわ、とコウタが言ったとき、サングラスをかけた男と一緒に、キョンちゃんが、来た。キョンちゃんはサングラスの男を愛おしそうに見送った後に俺たちを見つけ、凍りついていた。

キョンちゃんは明らかにイラついた顔をし、店の奥へと消えていった。コウタが、あっ、と言った時にはキョンちゃんは既になくなっていた。

指名パネルでは別人だと思っていたが、店内で実物を見てもやはり別人だった。だが本人を店内で見て初めて、パネルのどの嬢がキョンちゃんなのかが分かった。だが残念なことに俺はキョンちゃんを指名していなかった。笑。

俺はコウタより先にお迎えが来たので、その娘と一緒に部屋に向かった。その娘はクララと名乗った。全く和風な顔でクララかよ、と思ったが本人はそれで満足なのだろう。ハイジに出てくる、足が悪い女の子が好きだったからクララ、だと言う。予想通りだ。俺はキョンちゃんも客に同じことをしているのかと思うと、腹が立ってきた。

軽くシャワーを浴びている間、クララは手慣れた手つきで俺の身体を触った。まるで自分の手であらゆる部位のサイズを測っているみたいだった。彼氏、いるの？と聞いてみた。いるよ、とクララ。こういうとこで働いてて、何か言わない？と聞くと、彼ね、ホストだから何とも思っていないみたい。ホストだとお互い様でしょ？それもそうか。クララはシャワーを浴びた後も手馴れた手つきで身体を拭く。あの、何か命令してもらえませんか？あ、そうだ、ここはメイドが奉仕するというコンセプトの店だった。確かにクララも

メイド服を着ていたな。部屋に入ったら一瞬で脱いではいたが。俺はクララを寝かせ、俺が愛撫していった。クララには何もするな、と命令した。そのまま時間の半分くらいを使いクララをイかせ、その後に俺もイった。こうしてキョンちゃんも違う男に、と考ただけで目眩がしてくる。俺はこの部屋にいる間だけは考えるのをやめようと思ったが、つい同じように考えてしまい、あまり気持ちの良い時間ではなかった。

待合室でコウタを待つと、コウタは、キョンちゃんと一緒に出てきた。

ちょ、ちょっと待て、全然意味が分からない。なぜコウタがキョンちゃんと一緒に出てくるのだろう。たしかコウタは違う娘、確かマドンナとかいう嬢を選んでいたはずだ。コウタは明らかに俺と会いたくなかったかのような表情をしていたが、キョンちゃんはまるで何でもなかったかのように、またね、コウタ君、と言っていた。

俺が選んだ娘がさ、なんかよくわかんないけど実は予約が入っていてダメだとかって受付の男に言われてさ。もう俺、誰でもいいですよ、って言ったらオススメの娘がいますよって言われたので、じゃあその娘で、って言ったら、キョンちゃんだったんだ。驚いたけど、コウタにどう言おうかと迷ったんだけど、ごめん。

コウタは素直に謝った。仕事だから、これは仕事だからと頭の中で考えても結局は、何も分からなかった。それ以上は考えることをやめ、事実を受け入れるしかなかった。俺はコウタに、何をしたかを聞いた。分かってる、それを聞いたところで俺には何のメリットもないということは十分に分かっているつもりだったが、俺はコウタにそう聞かすにはいられなかった。

え、普通に、多分圭太が嬢にしてもらったのと一緒だよ。だってほら、仕事だろ？

俺はコウタの開き直る態度にイラッとしたが、、そうか、仕事か。そもそも俺が、風俗で働く娘と付き合っているのだから、クララが言っていたように、割り切りが必要なんだろう、俺は自分に、そのように言い聞かせた。忘れよう。忘れよう、この感情は。

何か食べながら締めて帰るかー、とコウタは言った。運動をしたので腹が減ったと言う。アルコールもすっかり抜けてしまった。俺たちはキョンちゃんたちと初めて会った、へぎ蕎麦の店へ向かった。店へ向かう途中、クララからメールが来た。ついさっきだぞ？営業熱心だな、と思ったがその文面を見ると、ただのビジネスではないような内容だった。このメール、ホストの彼が見たらどう思うだろう。俺はその内容を、素直には受け取れなかった。

キョンちゃんに言わせると、何も言わずに突然来た事に腹が立ち、腹いせの意味を込めてコウタを客に付けたんだそうだ。コウタはたまたま指名された娘がキョンちゃんだと言うのは薄々気づいていたそうだが、本人を目にした時はとても嬉しそうだったと言う。行為自体も紳士的で、とても愛情深い行動をしていたそうだ。何よりもなぜ何も言わずに店に来たのか、そこをはっきり

教えて欲しいとキョンちゃんは言った。言ったら何になる？理由なんてなんにもないよ。コウタがキョンちゃんが働いている店に行ってみたくて言うからたまたま近くで飲んだのでその帰りに寄ってみようかってなっただけだよ、と俺は言った。間違っていないし、そもそもなぜそれをキョンちゃんに言わなかったのは本当に覚えていないのだ。それくらい、他愛ないことだった。キョンちゃんこそ、そこになぜこだわるのか、俺はそっちの方が知りたかった。

クララちゃん、どうだった？

キョンちゃんは言った。

俺はどう答えたら良いのかさっぱり分からなかったが、沈黙しつづけるのは良くないので、素直に、楽しい娘だったよ、と言った。キョンちゃんは、そう、それは良かったね。コウタ君もね、あまりにも愛情に溢れた接し方だったから、私、挿れてもらっちゃった。とても暖かくて気持ち良かった。コウタ君は戸惑ってたけどね、結局は皆一緒なんだよね、男って。バカみたい。私が働いているところを見て圭太は嫉妬するだけじゃん。なんでそう思わなかったの？そもそも私の仕事だって割り切ってたんじゃないの？もう本当、しょうもないよね。俺は流石に腹が立ち、キョンちゃんを押し倒し、肩を押さえつけた。

そうやって力でなんとかしようとするのもバカな男って感じだよ。私はどうなっても怖くないから、レイプでもなんでもすればいいじゃん。痛めつけてよ。俺はこんな事をするためにキョンちゃんの店に行ったんじゃない。自分のしたことにガッカリした。つかそもそも、コウタの誘いなんて断れば良かったんだ。で、違う店に行けば良かっただけの話じゃないか。俺はそう思ったが、もうそんなことはどうでも良かった。ただの、ただの痴話喧嘩だ。もう終わりにしよう。俺はそっと、キョンちゃんの首に手をかけた。

俺は自暴自棄になっていた。気づいたら警察で、殺されると咄嗟に判断したキョンちゃんはたまたま手に持っていた携帯で警察に電話をかけていた。俺はキョンちゃんを殺すことなんてできないのに、キョンちゃんの首を締め続けていた。殺すことなんてできないのに。殺すつもりなんてないのに。警察はすぐに俺のアパートへ到着し、キョンちゃんから俺を引き離した。その際にテーブルの角に頭をぶつけ、俺は気を失った。そのまま警察に連れていかれ、目を覚ました時には目の前に50を越えているであろう年齢の警官がいた。

こっぴどく叱るとはこう言うことなんだろうな、と実感させてくれるような叱り方で、おっさん警官は俺を叱った。通報したキョンちゃんは隣の椅子にいて、俺が目覚ますまでにだいたいのことは話したようだ。

お前、この娘のこと、嫌いなのか？だいたいな、人間てのは好きか嫌いかははっきりしてんだよ。それが、どっちか分からなくなっちゃうのは、言葉が悪いんだ。言葉は人を動かす。だがその言葉によって人は傷を付けられ、終いには立てなくなっちゃう。するとどうなるか。立ってる人間を倒そうとするんだよ、言葉で。好きだから、同じ境遇に合わせようとする人もいるし、単純に嫌いだから蹴落とそうとする。人間、特に男は人の上に立ちたがる本能を持っているから、それをうまく操れないヤツは生きてる資格なんてねえんだよ。お前の理性、見直した方がいいんじゃないのか？こんな可愛い娘の首を締めるなんて、お前の方が生きる資格がないよ。わかったか？

警察から家に帰る途中、キョンちゃんは優しかった。おっさん警官にこっぴどく叱られた俺は滅

茶苦茶に凹み、その姿を見ていられなかったのだろう。どこかで何か食べて帰ろう。キョンちゃんは言った。赤羽警察署からタクシーで赤羽駅まで向かい、ゆうひ屋で塩ラーメンを食べた。フランス産の岩塩はとてまろやかで、ただただ気持ちを温めてくれた。

私さ、夜の仕事、辞めるんだ。実は圭太君たちが来た日、タッキーが来てさ。受付の兄さんが私を勧めてくれて、念願のご対面を果たすことができてる。嬉しかったんだけど、これで終わりか、って思ったら少しさみしくなっちゃった。けどね、今回のこともあるし、私、もういいやと思って。

俺はそうか、とだけ言い、スープを飲み干した。とても太っている女の人が一人でラーメン屋を切り盛りしている。数年前に訪れたラーメンブームではこの店が赤羽を代表する店の一つだと言われ、当時は行列が出来ていたが、今ではいつ来ても入れるくらいの客の入りだ。それでもやっていけているのは、この店を愛しつづけるヘビーな客がいるからだろう。

ちなみにタッキーは思ったほどイケメンではなかったそうだ。化粧映えする顔だったそうで、仕事がオフだったのももちろんノーメイクで現れたタッキーは、初めは誰か分からないほどだった。キョンちゃんは目を疑ったと言う。タッキーは攻め続け、キョンちゃんが休む暇もなくイカされ続けたそうで、リミットになるのが待ち遠しかった、とキョンちゃんは言っていた。なんというか、つまらない人だった、と最後にキョンちゃんは言った。

このまま真っ直ぐ家に帰るのも気が引けて、俺は談に行こうと言った。だがキョンちゃんは、今日は一人で帰ると言った。俺は大して引き止めもせず、ラーメン屋の軒先で別れた。

駅のホームで新しい連ドラのポスターを見つけた。北川景子と三浦春馬と言う、まあありがちなラブコメのようだった。二人は学校教師で、いわゆる同期という設定。学校は荒れていて、その学校を建て直しつつ、二人は恋に落ちるといふ、まあなんというか月9な割には2時間どらまのような展開というありがちな内容だった。二人の恋を邪魔する恋敵がいたり、結局は結ばれる運命にあるんだろうな、けどそんなドラマな展開なんて何にも無いよなあと思いつつ、俺はボーッと携帯電話を眺めていた。すると、一通のメールが届いた。クララからだった。

こんにちは。今日は出勤しています。けど私、なかなかお客さんをつけてもらえなくて、退屈しています。ケイタさんが来てくれたらな、って思ってメールしています。この間送ったメールにも書きましたが、ケイタさん、ものすごく私のタイプです。話とかも超面白いし。また、逢いたいな。ケイタさん、今何していますか？とっても寂しいです。逢いたい！

押しが強いメールだった。どこまでが本心なのだろうかと思って推測したが、もしかしたら全部が嘘なのではないかと思えてきた。もしかしたらクララという人間すらも、どこにもいないのではないか、なんてSFめいたことまで考えるようになってしまっていた。なんだかヤバいな、俺。やめよう、考えるの。

その夜は帰宅して一人で悶々としていた。クララへの返信はしなかった。未来なんて何も見えなさそうだから。俺の勝手な想像だ。俺はキョンちゃんへの罪悪感で心がいっぱいだった。気分がとても滅入っている。外へ出てみようかと思って時計を見たら、23時を既に回っていた。俺は帰宅してからの数時間、時間を忘れて家にいたことになる。腹も減らず、ぼーっとテレビを眺めていた。テレビではガキ使をやっていた。そうか、明日は会社へ行かなければいけない日だった。

テレビではハイポーがイジられていた。そろそろ寝るか。明日からまた新しいプロジェクトが始まり、そのためのテストを計画しなくてはいけない。次のプロジェクトも俺がリーダーにアサインされていたのだ。そのための結果を残さなければいけない。当然だ。

その夜、夢を見た。キョンちゃんが俺の上に馬乗りになり、俺の首に手をかけている。殺そうとしているのか、ただジャれているのかは良く分からなかった。「…ネ、シ…ネ」ととても小さな声で呟いているが、言葉の断片から推測すると俺を殺そうとしているようだった。しかし力があまり強くないため(というか夢だからその辺りは気分的でしかないが)、俺は痛くもかゆくもなかった。ただキョンちゃんは泣いており、怒りとか恨みとか、そういうものに溢れた顔がものすごく印象的だった。俺は戸惑った顔をしただろう。そして俺はキョンちゃんを跳ね除け、逆にキョンちゃんの上に乗るそのままレイプした。

とてもイヤな夢だった。俺は急に目が覚め、薄明るい部屋の中で時計を見たら、まだ朝の4時だった。気分が滅入っている。

実はそこから一ヶ月くらい、キョンちゃんとは会わなかった。キョンちゃんがどういう風に俺のことを考えているか分からなかったし(想像もしたくなかった)、俺から何かアクションを起こさなくちゃいけないんだらうな、とは思っていたが、こういう時はどうすべきなのか、イマイチ頭の中では理解できていなかった。

その間、何度か俺は同じ夢を見た。キョンちゃんが俺を殺そうとし、途中からは俺が上になり、キョンちゃんをレイプする。そこまで覚えている日もあれば、その後に俺がキョンちゃんを抱きしめるとか、首を絞めるとか、いろいろなバリエーションが発生したが、キョンちゃんが俺を殺そうとする、俺がキョンちゃんをレイプするというベースはきちんとルール化され、守られているようだった。

思い出の場所

沈黙を破ったのはキョンちゃんだった。やはり、という印象だ。

会社から帰り、王子駅に着いた時に、キョンちゃんかいた。待ち合わせをしようという連絡もしていなかったので俺は驚いた。誰か違う人と待ち合わせなのかな、と最初は考えたりした。が、俺を見つけたキョンちゃん表情を見る限りそれはないと感じた。俺たちはそれぞれの年明けを迎え、時代は新しい年をひとつ重ねた。キョンちゃんは特に変わった表情も無く、普通だった。今までと、普通。夜の仕事を辞めたせいか、どこかが変わったりしていないかと思っただけ、そう言うことも別になかった。この年になると一ヶ月なんてあっという間だもんね。

ちょっと飲んでいかないか、とキョンちゃんは俺を誘った。俺たちはサンスクエアの裏にあるおでん屋に行った。平日だったせいか、空いていた。何度か来た店だ。主人(常連からはお父さんと呼ばれていた)は俺たちのことを覚えていた。あれっ、久しぶりだねえ、ご両人。明けまして、おめでとう、今年もよろしくねー。ひどく語尾を伸ばす話し方だった。すっかり忘れていた。お父さんの話し方、ちょっとキモいよね。あっち系かな、と以前に話したことがある。

そういえば、キョンちゃんにも新年の挨拶をしていなかった。明けましておめでとう、遅くなったけど、というキョンちゃんも、おめでとうと言った。

俺たちは席に着き、プレミアムモルツを飲んだ。おでんはキョンちゃんの好きなつみれと、俺の好きなちくわぶ、あとは適当にお任せにした。あーあと、トマト。トマトのおでんはこの店の目玉商品だった。

話の趣旨は、結論から先に書いてしまうが、別れたいということキョンちゃんは伝えたかったようだ。なにそれ超早い展開、という感じだった。1年ももたない恋愛なんて、今までの俺が過ごした恋愛の中で最短だろう。だが別に、驚きはしなかった。仕方ない。俺も、キョンちゃんとの間に出来た溝、それも急速に深くなった溝を埋めることを疎かにしてしまったのだから。仕方ない。けど、そこに至るまでの経緯は少し教えてくれてもいいんじゃないかな。それくらいの権利はあるでしょ。

だって圭太君、クララちゃんと良く会ってるでしょ？聞いてるよ、クララちゃんから。もう付き合ってるって。私、お店は辞めちゃったけどクララちゃんとは仲良くてさ。

ん、今なんて言った？俺が、クララちゃんと会ってる？てそれをクララちゃんから聞いた？

クララがなぜそんな嘘をついているのか、甚だ心外だった。別れるとかそういう話よりも先に、その誤解を解かなければいけないと思った。ので、俺はクララとは会っていない、そもそもそんな嘘をつかれるのがなぜなのか分からない、と伝えた。

ふーん、まあ私にとってはどちらでも良いけど。もう圭太君の事、なんとも思わなくなっちゃった。急に。ごめんね。もうおしまい。クララちゃんと仲良くね。

誤解がどうだとかは別に関係が無く、キョンちゃんの中ではもう俺と別れることを決めているような腹づもりだった。俺はビールを一口飲んだ。初めて合コンで会ったときに飲んだビールと同じ味がした。プレミアムモルツだろうがラガービールだろうが、話題のインパクトが大きな時はだいたい一緒なのな。俺は話を反らした。身に覚えのない濡れ衣を着せられたのに、それを弁解する耳を持っていない相手に弁解するのは、全く意味のない事のように思えた。おでんが到着した。ここまであっという間の出来事だった。

人が別れる時はいつも悲しい。おそらく多くの人間がそう思うだろうが、こういう時はいくら飲んでも酔わない。今日も、まるでノンアルコールビールを飲んでいるかのような風情だ。おはよう、と言うくらいの重さで、キョンちゃんは、今までありがとう、と言った。そんなに軽いのかよ、俺たちのことって。俺は解せなかったが、キョンちゃんの気持ちは覆らないようだった。残念だが、終わりだ。誤解を解く隙間すら見つからないまま。

その夜に聞いた話の半分以上を忘れた。忘れたくもなるだろう、と思うだろう。嫌なことを忘れるっていう本能は、生きて行く中では大切なことなのだろうと思う。

ただキョンちゃんは、変なことを言い出した。別れたいけど、別れる前に思い出に残っている場所へ行こうと言うのだ。こんなこと、初めて言われたよ。

正直、受け入れるのも気が引けた。今更思い出の地を巡る旅なんて女々しいし、そもそもこんな短い恋愛の期間では思い出の場所なんて限られるではないか。だがキョンちゃんはそうしたいと言って聞かなかった。これも、折れないパターンだ。普段はいろんなことがどうでもいい性格をしているが、一ヶ月に二回くらい、何かのタイミングで絶対に譲らないことが発生する。冷蔵庫に食材を入れる時のレイアウト。リビングカーテンの色。他愛ないものばかりだったが、俺はあまりこだわりのない性格だったせいか、キョンちゃんのそう言うところがたまに愛おしくなった。私はひとりっ子だから、といつも言い訳をするが、その時の表情は堅く、その表情が普段よりも10歳くらい若返ったというか、子どもっぽい印象だった。

いいよ、行こうぜ。どこに？

圭太君はどこ？

あ、そういうこと？それぞれの思い出の場所を巡るの？

そう。私はね、あ、いっせーのせっ、で言おうか。

分かった。ちょっと考える時間を下さい。

じゃあトイレに行ってくるから考えてて。

そこから10分くらいだろうか、割と長いシンキングタイムを与えてくれたキョンちゃんは、メイクをちゃんと直してきた。

よし、じゃあ言おうか。いっせーのせっ、

驚くことにキョンちゃんは何も言わなかった。俺は一人で、アルタ裏の路地、と応えた。初めてキスをした場所だ。女々しいだろうな、今更、よりを戻そうとでも言うのか、俺は。ビールを飲むと、自分に嫌気がさした。

ずるいなー、俺だけ言ったよね？と言うと、へへへ、という顔をしてキョンちゃんは俺の顔を覗いた。

嬉しいな、私と一緒にだ、とキョンちゃんは言った。そういうこと？自分はどこでもいいので俺に決めさせたかった、ってこと？困惑した。

私も好きだった場所だから、別にいいの、そこで。えーと、よし、じゃあ行こう。

えっ、今から？明日、仕事だけど？

翌日の仕事は休むことにした。急に休んでいいほど自由性のある仕事ではなく、ある程度のポジションを与えられてはいるが、幸運なことにまだ正月ボケから回復していないオフィスの中で俺が割り当てられているタスクもそれほど緊急性の高いものではなかった。終電まではまだ少し時間があったが、その時間内にここまで帰ってくることは考えにくいし、そんな風にこのことを考えていると、キョンちゃんに見透かされそうだったからだ。じゃあ、行くか。俺たちは外へ出た。

外は寒い。まだ年明け間もない頃で、暖かい部屋から外に出たということもあり、非常に寒く感じた。酔ってないとは言え、二人ともアルコールを飲んでいるので多少身体も火照っているのだろう、普段よりも数倍寒く感じた。タイツを履いているとは言え水玉のミニスカートを履くキョンちゃんが不憫に見えた。それを聞いたところ、それ、前にも聞いたよね。案外暖かいんだタイツって。それにこれは普通のよりも分厚いやつだし。とキョンちゃんは言った。履いてみる？とも言った。いやいや、そんな趣味はないってば。あ、でも、ちょっと履いてみようかな、と思ったときにはキョンちゃんはすでに信号を渡り終えていた。おい、ちょっと待ってくれ。足元が少しふらついた。酔ったせいかな、と思ったが路面が凍っていたのだ。今夜は雪がふるかも、と朝の天気予報で言っていたのを思い出した。目の前の表情がぐるんっ、と一回転して俺は転んだ。横断歩道の途中だったので焦ったが、車は俺が立ち上がり横断歩道を渡り終えるまで待っていた。俺がドライバーに手を上げ、キョンちゃんの元に駆け寄った。大丈夫？圭太君、そんなに運動神経って鈍くなかったよね？エッチする時はアクロバティックな体勢もできるのにね、とキョンちゃんは少しだけ笑い、その雰囲気が寒気を一瞬だけ飛ばしてくれた。

俺にとってはたかが一年足らずの短い恋だったかもしれないが、いろいろなことがあった。俺たちの恋仲を進めるきっかけを作ってくれた東さんが亡くなり、コウタが荒れてしまったり、エイチとマコッちゃんがどんな恋を育んでいるのか気になって二人を尾行したり、どこまで歩けるか試そうと言って上野から赤羽まで歩こうとしたけど千石あたりで道が分からなくなって駒込までタクシーに乗ろうとしたら余りにも近すぎて運転手に乗車拒否されたり、たかが一年だが過ごした時間は割と濃密だったのかもしれない、と思った。

王子から田端で乗り換え、山手線で新宿へ向かった。その間、俺たちはあまり喋らなかった。二人とも思い出を反芻しているような感じだった。思い出が走馬灯のようにはよく言うが、山手線の窓から見える風景と共に、キョンちゃんとの思い出も頭の中を駆け巡った。キョンちゃんはこんな風に恋愛を断ち切るように暮らしていたのかな、ふとそう感じた。俺が連絡をしていないとは言え、あまりにも唐突だろう。順序というものもあるような気がする。だんだん冷え切ってきたり(俺たちはそれに含まれるのかもしれないが)、ケンカが絶えなかったり、浮気が目立つようになってきたりなど、様々なところで「別れ」のきっかけが見えてくるだろうが、そのようなこともあまりない中で、いつの間にかお互いの間に出来た溝を埋める作業もせず、そのままお終い、という、イヤにあっさりとした別れ方だと思った。あっさりすぎるだろう、と思ったがその反面、キョンちゃんの気持ちを俺に戻すための労力を俺が惜しんだ。俺の中でも、キョンちゃんから別れようと言われるのを利用してしまったのかもしれないが、この恋はもう終決してしまっても良いかなと思ってしまった。

新宿に着いたのは23時を少し回った頃だった。平日だし、寒いし、正月明けで間もないから人も少ないだろうと思ったが、着いたらそんな予想は全くの見当違いだった。まだ新年会シーズンか。仕事帰りに飲んで帰ろうとする人がとても多かった。場所柄、若者が多いように感じた。年を明けて20日を越えたと言うのにまだ正月気分の人が多く、もうそれなら1年中正月気分できて下

さい、と言う感じだ。しかも金曜日ならまだしも、今日はまだ水曜日だった。

ちなみにさ、俺が思い出の場所を東さんの実家って言ったらどうするつもりだったの？静岡だし、今から行くのは無理だよ？あの時も、ひとつのちゃんとした思い出になっていると思うけどな、俺は言った。コウタはあの時、自分だけ仲間はずれになるのがイヤだったが、実質あの時はコウタもひとりで引け目を感じていたのだが、結果的には一緒に行って良かったな、と今では思っている。

静岡？うーん、考えてなかったな。多分、圭太君なら新宿だって言うと思ってたし、そう信じてたから。けど、まあ、そう言われたら、静岡まで行ったかもね、その時は今日じゃなくて週末に。週末に？それじゃあ新宿も今日じゃなくて良かったのかな？

すごいね、そんなに意味のあることなんだ、思い出を巡る旅って。

そう。今までも同じように別れる時にね、こうして来たんだけど大概の人は一緒に行ってくれないんだよね、お前一人で行けとか言われて。珍しいよね。嬉しいけど。優しいね、圭太君。さすが、私と付き合った人だ。

そんな話をしている間に、あの路地にも近づいてきた。恋が産まれた場所だ。今日、終わりになった恋の発端はあの路地だった。あの時、なんであんなにキスがしたかったんだろう。今ではどんな心境だったのかをほとんど忘れてしまった。キョンちゃんと、ただ結ばれたかっただけだったのかもしれない。あの時はきっと、世界で一番好きな人だったのだろう。

だが、その路地はもうなかった。

路地付近にはロープが貼ってあり、近くまでは行けないことが分かった。驚いて近くまで行くと、あの路地はもう無くなっていたことが分かった。路地を含んで大きな区画が再開発対象となり、全てが取り壊され新しい複合施設が出来上がる計画が進んでいた。がっかり、俺たちはがっかりした。路地自体も白い即席な壁に阻まれ、見るができなかった。

ええー、何これ、超残念。キョンちゃんは言った。俺も同感だ。もう終電も無くなってしまった。俺たちは、路頭に迷った。

こうして思い出の場所を巡る旅は終了した。とても呆気ない幕切れだ。そう感じた時、急に寒くなった。そうだ、冬だったんだ。

というわけで、思い出を巡る旅は本当にあっさりとして終了してしまっただ。

俺とキョンちゃんの恋は、いったん、これで終わりとなる。幕切れの後、後腐れなくすんなりと駅前で別れた。一緒に赤羽までタクシーなどで帰っても良かったかもしれないが、そのままアルタの前で別れた。キョンちゃんは三越の方へ向かったので、俺は歌舞伎町の方へ歩いた。別に行く宛もなかったが、キョンちゃんと同じ方向に歩くのも気が引けたので、一応、繁華街の方へ歩くことにした。なんだ、こんな幕切れなら明日の仕事を休みにすることもなかったな、今更になってそんな風に思ったが、もうどうでも良かった。このまま寝ないで仕事に向かうか？と自問自答してみたが、なんだか一度休むと決めた手前、なんだかよく分からないが気分を変えるのも気持ちが悪かった。

いや、よく考えると結構へこたれているように感じる。明日休もうと決めたから会社を休むのではなく、失恋に対してのショックが結構大きく作用しているような気がする。この辺のニュアンスって言葉にするのは難しい。全て「なんとなく」で片付けられるような気もするし、ただ自分のポキャブラリーが足りないせいかな、本とか読んでないしな、などと考えたりもしてしまう。まあいい、一度休もうと決めたので、どうなろうと休むのは休む。心が揺らぐことのないように自分に強く言い聞かせた。

さて、どうしよう。漫画喫茶に行くのもな。歩いて王子まで帰るのも、なんとなく違う気がする。せっかく新宿に来たのに、やり遂げた感がないので、どうも中途半端な気がするのだ。どこか、どこかへ行きたい。どこだろう。しばらく考えながら歩いた結果、ひとつの答えが浮かんだ。

そうだ、あのへぎ蕎麦の店へ行こう。初めて行ってから何度か行って、キョンちゃんと俺は主人に顔を覚えられていた。俺は大きく方向転換をした。

とても今更なことだが、初めて出会った場所も、思い出の場所として相応しい。その場所がなければ、恋に発展することなんてなかったのだから。もしかしてキョンちゃんは、あの店には向かっていないだろうか。歩いていた方向がそっちの方なので、もしかしたらもしかするかもしれない。

思い出の場所を巡る旅をもう一度しよう、まだ間に合うのなら、キョンちゃんと一緒にもう一度、最後の思い出を作りたいと思った。とても一人よがり自分勝手な思いだな、とは思うけれど、どうせあの路地にももう戻れないのだし、それだったら別にやり直しても良いじゃないかと思った。

ちょっと強引すぎるかな、と思ったが、なんだかこのままキョンちゃんと別れてしまうのは、ちょっと潔すぎる感じがしていたのだ。

店のほうに向かって歩いてきたが、キョンちゃんとは会うこともなく、店の前まで来てしまった。やっぱり、自分だけがそう感じていただけか。そりゃそうだよね、そんなドラマな展開ってそうそうないもんね。俺の人生って、そんなドラマチックな展開なんてひとつもなかったもんね。俺、きっとそういう星の下に生まれてきたんだよね。

俺は半ば自暴自棄になっていたが、失恋したことによる痛手が時間を重ねるにつれて大きくなってきた。事実としても俺たちは別れてしまったし、ここで俺がどうあがいてもキョンちゃんの気持ちに変化はないだろうし、そう考えるともう何もないうまま、朝を迎えるんだろうな、と思った。

だが、ここでドラマのような展開を迎えることとなった。まさかと思っていたが、キョンちゃんが店の中にいたのだ。キョンちゃんはカウンターで、泣いていた。

店の扉を開けた瞬間、店主が俺を見るなりキョンちゃんを指差した。キョンちゃんは店に入ってカウンターに座るなり泣き伏してしまっただろう。店は他に客がおらず、店主の顔には「そろそろ店を開めたいんだけどねえ…」と書いてあった。

キョンちゃんは俺が店に入ったことに気づくと何事もなかったかのように立ち上がり、何も頼まずにごめんなさい、と言った。店の空気は止まっている。店主はキョンちゃんにどう応えたら良いか考えあぐねているようだったので、俺が、生を二つください、と言った。

これ、ご馳走するから、仲直りしてやんなよ。あんまり彼女を泣かしちゃダメだよ？こんなに可愛い彼女を。と店主は俺に言った。

いや、実はさっき別れたんです、しかも俺はフラれたほうで、とは言えず、俺は店主に、そうですね、迷惑をかけてすみません。いっぱいだけいただいたら引き上げますので、と言った。店主はお通しで余っていた煮物を出してくれた。店はすでに有線も止まり、ビールはなかなか進まなかった。なにしろ俺たちが何も喋っていないのだ。俺は気まずさを感じたので、俺のビールを一気飲みし、そのまま一口も飲まれていないキョンちゃんのビールも継げて一気飲みをした。ごちそうさまでした、遅くにすみませんでした、また二人で来ますので、と店主に言い、店を出ようとした。

何があったのかは知らないしきっと君たちも言いたくないと思うけどさ、今飲んだビール、美味しくなかったでしょ？気持ちが沈んでる時に飲む酒はね、そういう風にできてるの。楽しい時に飲む酒とそうじゃない時に飲む酒、同じものでもね、飲む時の気分によって味とか酔い加減とかね、変わってくるんだよ。君たちもお酒は好きだと思うんだけど、楽しい時に飲まないで勿体無いよ。楽しくない酒なんてね、悪酔いするだけだから、気をつけなよ、と店主は言った。

店を出るとキョンちゃんは俺の腰に手を回し、俺はキョンちゃんを強く抱きしめた。

お腹が空いた。もう、なんかいろんな事ばかり考えちゃって、思考回路が壊れちゃった。何も考えたくない。

話を聞きたいのは山々だったが、まずはキョンちゃんの空腹を満たすのが先だと思った。この時間にやっている店なんてほとんどないが、俺は何がどこにあるのか、過去の記憶をさまよった時、一つの答えが浮かんだ。

マックに行こう。

そのマックは、初めて会った夜に行ったマックだ。

俺たちはまだ、思い出の場所を巡る旅を続けていた。図らずも。あの時は朝マックだったが、まだ今日は夜メニューのままだった。キョンちゃんももしかして、ここがあの日に入ったマックだという事を忘れてしまっているのだろうか、と思ったが、ちゃんと覚えてさっっxいた。

思い出の場所、これで3つ目だね。このまま新大久保のホテルに行って、赤羽のホテルにも行ったらすごい事になるね。

俺はビッグマックを、そしてキョンちゃんはフィレオフィッシュを食べた。飲み物は二人とも暖かいコーヒーだ。

店に入ったらさ、なんか初めて出会った夜を思い出しちゃってさ。あの時は東ちゃんもいたし、私もドキドキしててさ、あーなんか懐かしいなあ、って思って。店長さんがあれっ、今日は一人なの？彼氏は？って聞かれたら涙が止まらなくなっちゃって。ダメだなあ、別れようと思ったのに、今までの恋と違って思い出の場所とか、関わった人が今回は全部くっついてきてて、その思い出も全部捨てちゃうのかと思うと辛くて。圭太君だけとお別れする訳じゃないんだよね。

キョンちゃんは実は5年ぶりの恋愛だと言う。その5年が、キョンちゃんを大人にさせ、軽い恋愛から気持ちのこもった恋愛にさせてしまったのかもしれない。25歳を超えると何かが変わるのだろうか。人によって個人差があると思うので一概には言えないが、周りで結婚する人がいたり、親との確執が解けたり、情深くなったりなど、まあキョンちゃんの中にもいろいろあるんだろうな、と思う。

俺はというと、キョンちゃんとは別れようと思っただけだけど、キョンちゃんを感じを見る限りではまだ恋人を続けたほうが良さそうだ、と思った。そもそも別れるなんて事自体が一晩の過ちだったのかもしれない。

でさ、クララちゃんがなんでそんな嘘をついたのかについてだけど、、、

俺は今更だが、嘘の検証を始めた。

もういいよそんな事。ホテル行こう、ホテル。

キョンちゃんは自分の身体を暖めて欲しいと俺に懇願した。

終わり。